

学術変革領域研究(A)「生涯学」事務局

Email: [lifelongsciences@gmail.com](mailto:lifelongsciences@gmail.com)

<https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>

2020年度～2024年度 学術変革領域研究(A)

# 生涯学の創出

—超高齢社会における発達・加齢観の刷新

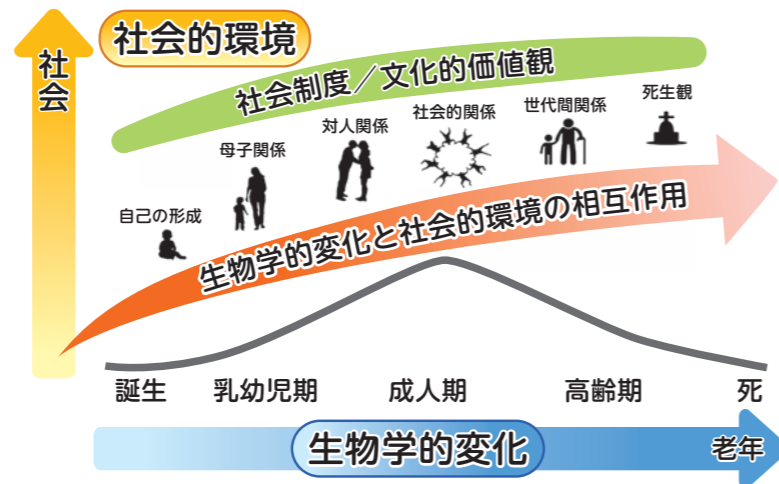


# 多様な成長と変容を繰り返す 新しい「人間の生涯」の理解をめざして

領域代表 月浦 崇  
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

65歳以上の高齢者の割合が総人口の28%を超えている我が国にとって、超高齢社会に対して社会全体としてどのように対応していくのかは、喫緊の解決が求められる重要な社会問題です。これまでは、人間の生涯は「成長から衰退へ」という単純な枠組みでとらえられてきましたが、人生100年時代の到来とともに、従来のような固定的な生涯観だけで人間の生涯を理解することは難しくなっています。そこで本領域では、従来の生涯観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返すプロセス(下図)としてとらえ直すことを目的とした、新しい学際的研究領域である「生涯学」を創出し、研究を展開します。

そのために本領域では、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する予定です。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざしてまいります。



## 目次 Contents

- 領域代表挨拶 ..... 02
- 領域概要 ..... 03
- メンバーインタビュー
- Vol.7◆倉田 誠 ..... 04
- Vol.8◆寺本 涉 ..... 07
- 研究班一覧
- 研究組織図 ..... 10
- 計画研究班一覧 ..... 10
- 公募研究班一覧 ..... 15
- 2021-2023年度活動報告
- アウトリーチ活動  
「公開シンポジウム」開催報告 ..... 25
- 東北大学社会教育主事講習への  
「生涯学」の導入 3年目 ..... 26
- 「生涯学」領域会議・  
国際シンポジウム開催報告 ..... 28
- 研究クローズアップ
- Features02◆  
現代女性の健康と人生を支える  
「女性のための生涯学」 ..... 32
- 受賞報告 ..... 37
- 活動報告一覧 ..... 38
- 業績一覧 ..... 45
- 書籍刊行予告 ..... 54

# 領域概要

## 本領域の目的

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返すプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文

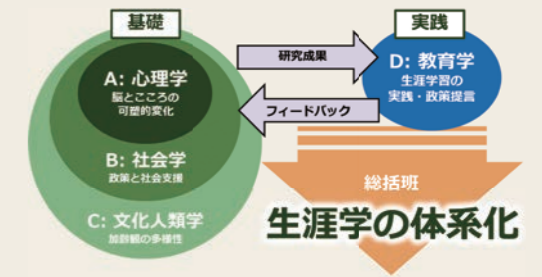
化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざす。

## 本領域の内容

本領域では、既存の学問分野にとどまらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする(認知心理学、生理心理学)。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する(臨床心理学)。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする(社会学)。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程もしくは消失過程が、文化や生活環境が違う場所ではどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフ

サイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る(文化人類学)。そのうえで、これらの基礎的知見を基盤として、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する(教育学)。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、さらにそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する(下図)。



## 期待される成果と意義

本領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の実態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人

間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的変化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。



「典型」から外れた

「べき」に縛られた生き方をフィールドで拾い上げ  
「べき」に縛られた生涯観を変える

倉田誠  
ヒトモノ班代表

メンバー・インタビュー Vol. 7

既存の生涯観の革新を目指す生涯学において、なぜ「ヒトとモノの関係」をテーマにした文化人類学の班が作られたのか。サモアで長く「障害」に関するフィールドワークをしてきたヒトモノ班の倉田さんに伺いました。

取材・構成…江口絵理  
撮影…植田真紗美

———ご専門の「医療人類学」とはどのような研究分野ですか？

簡単に言うと、病気に関する人びとの考え方や医療に関連するさまざまな現象を対象にする文化人類学の一分野です。私の主なフィールドはオセアニアのサモアで、人々がいわゆる“障害”をどう受け止め、どう対処しているかをフィールドワークによって調査しています。

———障害の受け止め方は日本とはだいぶ異なるのでしょうか？

私がフィールドに入った当時は、「健常」と「障害」という区別がなかったですね。そもそも、「人はこれぐらいできるのが“普通”」という考え方をしていないのです。

サモアでは家族の中で子どもも、子守や家事をします。上の子が弟妹に仕事をさせるときには、「この仕事はこいつにはできないから、別の弟にやらせよう」とか、「妹はこの仕事をやらないから、あっちの仕事をさせよう」という形でやりくりしています。

“ 生身の人間の能力というより、モノとヒトの組み合わせから生まれるものにもとづいて、私たちは生きている ”

高齢で足が不自由になった人は、杖などはほとんど使わず子どもや孫の肩を借りて車まで移動しますし、自分の手が届かないところに必要なものがあれば、やはり子どもを呼んで取ってもらっています。

———ほかの人と同じようにできないならできるように訓練しよう、車椅子などを使って本人の不自由さを低減しよう、と考える日本や欧米のやり方とはちょっと対照的ですね。

実はサモアでも、十数年前から現地のNGOにオーストラリアなどからの援助が入って、車椅子や起立支援のリハビリ用具が提供され始めました。

しかし、そうした“モノ”をもらった人は、周囲から「特別な支援を必要とする人」と見なされるようになっていきました。それまで区別されていなかったのに、人がモノと組み合わせることで「特別なニーズを持った者」とみなされるようになったのです。サモア語には存在していなかった「障害(Disability)」という言葉の訳として、「スペシャル・ニーズ」を意味するサモア語(*Manaoga fa'apitoa*)があたりになるようになりました。

人間を評価するときに、生身の本人だけでなく“モノ”が関わっている。それが、私がヒトとモノの関係に注目したきっかけでした。

そのようなところに生涯学の準備段階でお誘いをいただき、喜んで「ヒトモノ班」として参加させていただきました。

私たちの班には、さまざまなヒト・モノ関係を研究する専門家が集まっています。自助具、義足や義肢、生理用品、楽器、育児用具や介護具、フィットネス用具など……。文化人類学者だけでなく、発達心理学者や福祉工学者、理学療法士の方もいます。また、障害だけでなくジェンダーという視点からヒトとモノとの関係を考えようとしている方もいます。

コロナ禍で海外調査ができなかったぶん、国内でフィールドを共有しながら共同調査を行い、畑違いの研究者の鋭い視点や新鮮な疑問に刺激を受けながら研究を進めているところです。

———異文化を観察してきた文化人類学者から見て「人間は、生まれて、成長し、やがては衰えて死ぬ」という生涯観は、日本に限らず普遍的なものだと思いますか？

フィールドワークでずっと個々の事例を見てきた私としては、サモアだろうが日本だろうが「標準的な」成長から衰退までを描く曲線に沿った人生を歩む人のほうが少数派ではないかと思っています。

これという障害や病気がなく、20～50代であれば「自分は障害や加齢による不自由さとは無縁の、自立した存在だ」という感覚を抱きがちですが、それは幻想に近い。実際には誰もが、モノやサービスに支えられた上で能力が発揮できているのですから。

標準的な曲線からすると、40代の私はまだ本格的な衰えより前にいることになっています。しかし私の視力は10代で大きく低下しました。もしメガネという“モノ”がなかつ





**倉田誠**(くらたまこと)  
東京医科大学医学科 准教授

三重県生まれ。神戸大学や国立民族博物館などでの研究員を経て、2014年より東京医科大学へ。2020年から現職。専門は医療人類学、生命倫理学、障害学、オセアニア地域研究。長期にわたるフィールドワークを通じて、サモアにおける病気や障害の捉え方とその変遷を記述してきた。共著に『交錯と共生の人類学——オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』(ナカニシヤ出版)など多数。

たら私はフィールドワーカーにはなれていなかったかもしれません。

サモアで調査をしていると、私が当然のように依存しているメガネやサンダルなどの“モノ”がないと、私自身は、周りの人が当たり前でできていることを「できない」人間であることに気づかされる場面がたびたびあります。

つまり、生身の人間の能力というより、モノとヒトが組み合わせられて生みだされるものにもとづきながら私たちは生きています。同じ人物に対しても、モノとの関係によって評価が変わりうるわけですから、「標準的な成長—衰退」というモデルが通用する場面、当てはまる人はごく限られていると思います。

——— **それに変わる新たな生涯観の提示が生涯学における文化人類学の役割でしょうか？**

新たな生涯観を提示するというより、日本でふつうに思い描く“典型”から外れている人々の生き方を拾い上げていくことで「人の生涯はこうであるはずだ、こうであるべきだ」という概念的な縛りを解き、新たな生涯観を模索するための視点を提供できればと思っています。

日本の小学校の音楽の授業では全員がリコーダーを吹くことになっていますが、指や腕が不自由な人にとって、リコーダーはとても難易度の高い楽器です。

そのとき、「自分の体でも吹けるようにリコーダーに手を加える」という方法もあれば、「通常の奏法や姿勢とは違

う方法で吹く」方法もありえる。「リコーダーではなくピアノで演奏する」という選択肢もあるはずです。

ただ、日本では“標準”に寄せようとする圧力が非常に強い。昔の話ですが、片手が不自由な生徒が自分なりにリコーダーを加工し、オリジナルの運指で吹けるようになって、試験で運指を問われ、標準の運指とは異なる回答だったためにバツをつけられたという話も耳にしました。

そのような社会では、標準的に物事をこなせなくなったら「もうダメではないか」と不安になります。それでは、加齢や障害によって人は苦しくなるばかりです。

一方、サモアでは、「Aができないなら、Bで代替すればいい。CさんができないことはDさんにやってもらえばいい」というように、ダメだったときに別の選択肢が多いように感じます。もしかしたらそういう社会のほうが、高齢になっても、障害を持つことになっても生きやすいかもしれません。生涯学で私たちの班は、そうした社会を成り立たせる基盤を探っていきたいと考えています。

リコーダーを例にとるなら、教育学と連携することで探ることができるかもしれません。あるいは奏法の工夫に着目すれば、文化人類学の技能班の方々と議論も可能でしょう。他分野、他領域の方々と「これがダメならあれで」という生き方を支える社会の実現に必要なものを考えていけたらと思っています。

**寺本 渉**  
知覚・認知心理班代表

知覚・認知心理班は、高齢者が知覚の衰えをどのようにカバーしているかを実験で確かめようとしています。代表の寺本さんに、この班が生涯学において、実験の先に何を発見しようとしているかを伺いました。

取材・構成：江口絵理  
撮影：平川雄一朗

**人間の可塑性を引き出す手立てになり得る  
知覚と運動と補償の関係を探る**

——— この班は視覚や聴覚といった「知覚」を対象としているとのことですが、寺本先生ご自身も知覚をメインに研究されているのでしょうか？

はい、「人が体を動かしているときに、自分の体の動きや外部の世界をどう知覚するか」に興味があって、学生時代からVR装置を使った実験をしてきました。

——— **なぜ、「体を動かしているとき」なのですか？**

知覚に関する研究はほとんどが体を固定した状態で、つまり日常の生活とはかけ離れた状態で計測されています。でも、より自然な状態の人間の知覚について知りたいと思ったんです。

——— **生涯学にはどのような経緯で参加されたのでしょうか？**

実は、知覚・認知心理班は生涯学の発案者である杉田陽一先生が立ち上げられた研究班でした。ところが

メンバー・インタビュー Vol.8





“加齢とともに進む、知覚の機能低下を”  
他の知覚でカバーし調整する  
「補償」のメカニズムを突き止める

杉田先生が急逝されてしまい、同じ分野の研究者であり、杉田先生にもお世話になってきた私が後を引き継いだのです。研究タイトルの「知覚系の知識獲得機構の加齢変化」は杉田先生がつけられたものをそのまま残しています。私自身は高齢者だけでなくすべての年齢層の成人を対象にしていますし、情報を取り込んで処理する「知覚系」だけでなく、それをアウトプットする「運動系」にも注目しているのですが、この生涯学では高齢者の知覚系に重点を置いて実験をしています。もっとも、知覚系と運動系は切り離せない関係ですが。

——— 知覚の加齢変化をとらえるとは「衰え方」を実験的に確かめ、報告するというのでしょうか？

たしかに高齢者の知覚は加齢とともに衰えます。しかし、単に衰えていくばかりではなく、よく機能している他の知覚を利用して外部の世界の情報を処理しているのではないかと考えられています。

たとえば、老人性難聴が進んで人の話が聞こえにくくなくても、唇の動きなどの視覚情報で補ったりして、結果的に難聴の影響を無意識に低減させている、などですね。このように複数の感覚を組み合わせて機能低下をカバーすることを、ひとまず「補償」と呼びましょう。

この補償がうまくできている人は、ある知覚の機能低下が起きても実際の低下ほど衰えを感じることなく生活

が続けられるでしょうし、うまくできていない人は加齢とともに顕著な機能低下が表れると考えられます。

人は高齢になればなるほど、同じ年齢でも衰え方に幅が出てきます。知覚の機能低下を補償する力の違いも幅を生む一因だとすれば、この研究で補償がどのようなメカニズムで起きているのかを突き止めることで、高齢者の補償する力をサポートする、すなわち加齢による衰えを緩やかにする方法を見つけられるかもしれません。

——— 何かわかってきたことはありますか？

いまはまだ、高齢者の知覚機能低下に際して補償が起きていることを実験的に確かめている段階ですが、少しずつ、高齢者のほうが若年者よりも複数の感覚を使って処理しているらしいことがわかってきました。

また、補償がうまく使われている人と使われない人の違いを分ける要因として私たちが注目しているのが「運動」です。実験の結果からすると、運動機能の高い人のほうが補償をうまくやっているように見えるのです。

——— 高齢者が寝たきりになると認知症になる、とか、高齢者も運動をすると記憶力が維持されるという話をよく聞きますが、体を動かすと認知だけでなく知覚も保たれる、ということですね？

はい、まだ仮説ですが。運動と認知機能に関する研究

は多いのですが、運動と知覚機能の関係を調べた研究はほとんどないので、この班ではそこを開拓しようとしています。

高齢者は知覚が衰え、外部世界の情報を取る時にノイズが多い状態になっています。しかも、衰えは一時的に起きて固定されるものではなく、その後も徐々に下がっていくことが多い。人はその変化にあわせて、情報の処理の仕方を調節していかなくてはなりません。

調節するにはフィードバックが必要です。体をよく動かすことによって、その結果が戻ってきて、自分の知覚の答え合わせができる。そのループを回すことが補償を助けているのではないかと推測しています。

——— 補償する力を上げる方法や習慣が見いだされれば、生涯学としても大きな成果になりますね。

人間の可塑性を引き出すものになり得ると思います。体が動かせない人でもVRでトレーニングできるようなプログラムが作れるといいですね。とはいえ、道はまだま

だ遠いですが。

——— ほかの分野との連携についてはいかがですか？

知覚と運動との関係を調べるなら、日常的にその人がどれほど運動しているか、これまで運動してきたかが知覚機能の低下にどう影響を与えるかにも目を向けるべきだろうと考えています。認知機能の低下を左右する「認知予備力」を研究されている松井三枝先生とのつながりがありえるのではと思っています。

また、障害のある人が道具を使うことも、ある意味で「補償」なので、文化人類学の倉田誠先生のご研究からも学べるかもしれません。

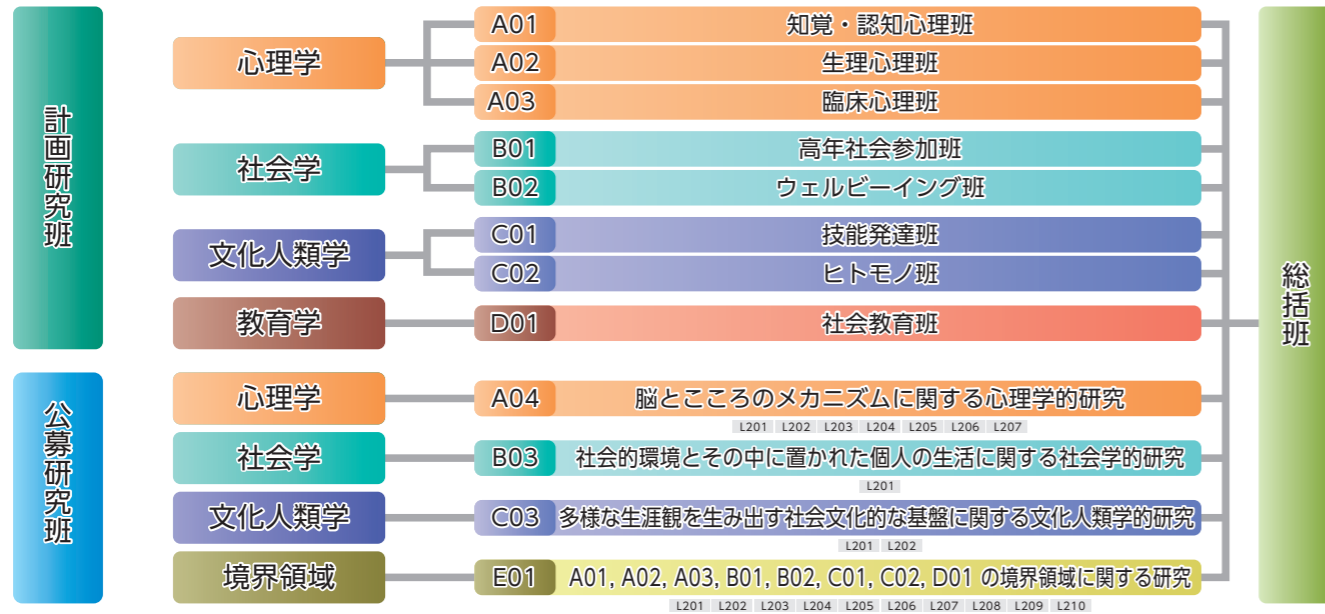
分野をまたいで実験をデザインし、限られた年数で学術的に信頼の得られる結果を出せるかというところが難しいと思いますが、それぞれの分野で得られた結果や洞察を持ち寄り、議論することで、「生涯学」としてのメッセージを紡ぐことはできるのではないのでしょうか。



寺本 渉(てらもと わたる)  
熊本大学大学院人文社会科学部 教授

秋田県生まれ。専門は知覚心理学・認知心理学。脳波計やfMRI、VR装置など多様な装置を用いて、人間の知覚の身体性や多感覚統合を明らかにする研究に従事している。2004年神戸大学大学院文化科学研究科で博士号(学術)取得後、産業総合研究所やドイツのマックス・プランク研究所、東北大学電気通信研究所での研究を経て、室蘭工業大学大学院工学研究科准教授に。2015年熊本大学文学部に着任し、2018年より現職。『基礎心理学実験法ハンドブック』『生き物と音の事典』『図説視覚の事典』(いずれも朝倉書店)を分担執筆。

# 研究組織図



## 計画研究班一覧

### 知覚・認知心理班(認知心理学)

A01

#### 知覚系の知識獲得機構の加齢変化



**代表者**  
寺本 渉  
熊本大学大学院  
人文社会科学部 教授

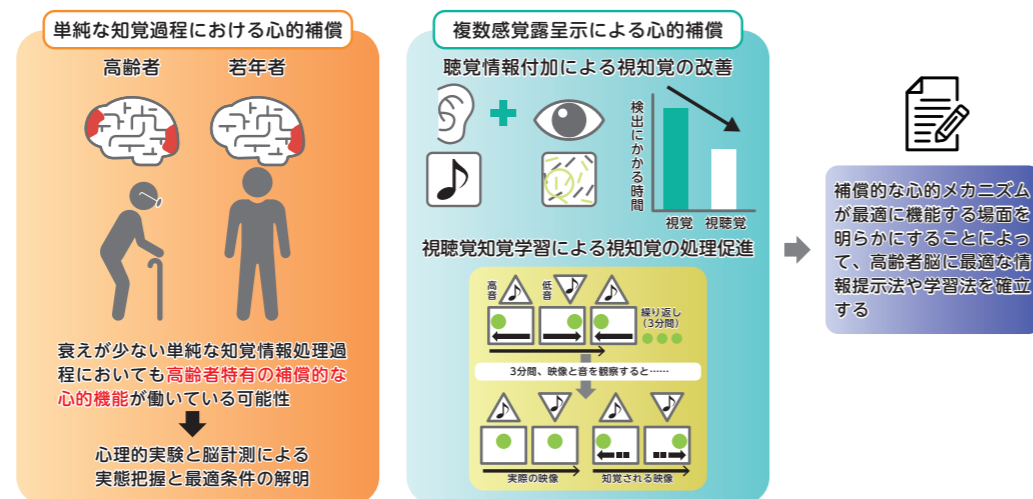
**分担者**  
日高聡太  
上智大学 総合人間科学部 教授  
川越敏和  
東海大学 文理融合学部 講師

**研究概要**

本研究では、特に複数感覚情報の処理に着目し、高齢者における心的な補償機能の存在を確認し、そのメカニズムを明らかにすること、そして、高齢者、ひいては人間が本来もつ知覚・認知の可塑性を最大限に引き出し、より豊かな生活をおくるための方

法を提言することを目的としている。現在までに、身体運動機能が低下した高齢者において、身体位置感覚や身体所有感において視覚情報による補償が顕著にみられることや、行為の結果を知覚する際、特に実行機能の低下した高齢者では、感覚情報よ

りも知識を優先する傾向があることなどを明らかにした。その他、音知覚や注意システムにおける補償や顔知覚の加齢変化等について、身体運動機能、実行機能、社会的機能との関連性に着目しながら検討を進めている。



### 生理心理班(生理心理学)

A02

#### 記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構

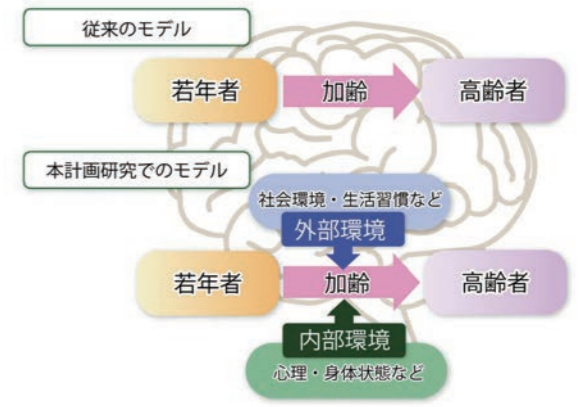


**代表者**  
月浦 崇  
京都大学大学院  
人間・環境学研究所 教授

**分担者**  
朴 白順  
弘前大学大学院 保健学研究科 准教授  
上田 竜平  
京都大学 人と社会の未来研究院 助教

**研究概要**

本計画研究では、ヒトの記憶の加齢による経年変化を脳の器質的变化だけで説明するのではなく、社会的環境との相互作用の中で、どのように脳内メカニズムが可塑的に変化するかをの視点から解明することを目的とする。その目的を達成するために、健康若年成人と健康高齢者の記憶に関連する神経メカニズムを脳機能画像研究から検証すると同時に、脳機能画像研究で得られた知見の機能的妥当性を明らかにするために、神経疾患患者を対象として神経心理学的手法によって検証する。これまでの研究では、他者との社会的関係によって影響を受ける記憶の神経メカニズムとして、眼



窩前頭皮質と海馬の相互作用メカニズムが重要であることや、デフォルトモードネットワークと前頭頭頂ネットワークの2つの脳機能ネットワークが、共感性と主観的幸福感を媒介することが認められている。また、表情のような顔に由来する社会的信号の処理に関わる神経表相が加齢に

よって変化することや、表情による顔記憶への影響の基盤となる神経ネットワークが加齢によって変化することも明らかにされている。今後も継続的に本研究テーマを掘り下げていくことで、当初の目的に対して多角的にアプローチしていく予定である。

### 臨床心理班(臨床心理学)

A03

#### 認知機能からみたこころの健康へのアプローチ ——予防とレジリエンスのために

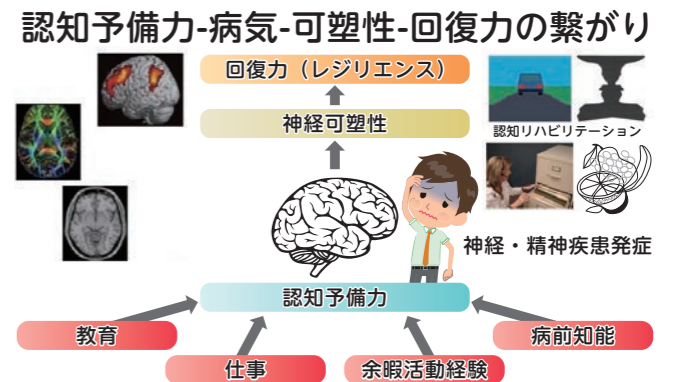


**代表者**  
松井 三枝  
金沢大学 国際基幹教育院  
臨床認知科学 教授

**分担者**  
吉澤浩志  
東京女子医科大学 脳神経内科 准教授  
菊谷まり子  
金沢大学 国際基幹教育院 准教授  
中田光俊  
金沢大学 医業保健研究域医学系 教授  
木下雅史  
金沢大学附属病院 講師

**研究概要**

認知機能という観点から、統合失調症および青年や成人とくに高齢期までの脳器質性疾患、認知症や気分障害について検討する。これらの疾患では認知機能障害がしばしば認められることが知られており、日常生活機能や精神機能の維持および社会復帰には認知機能の問題が大きいと考えられる。これまで健康成人のメンタルヘルスと適応性の調査を行ない、認知予備力との関連を検討してきた。さらに、脳腫瘍患者、認知症患者および精神疾患(統合失調症と気分障害)の認知機能と認知予備力と



の関連を調べてきた。さらに、これらの患者の認知機能と認知予備力の検討をおし進め、社会復帰や術後回復力の予測データを構築する。さらに、認知機能・認知予備力と脳構造・脳機能との関連を検討することにより、神経可塑性への寄与を明らかにする。このことにより、新しい生涯観の下で人間の一生を支える脳とこころの機能維持に資する機構の解明に寄与することをめざす。

高年社会参加班(社会学)

B01

高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索



**代表者**  
筒井 淳也  
立命館大学 産業社会学部 教授

**分担者**  
菊澤 佐江子  
法政大学 社会学部 教授

竹内 麻貴  
国立社会保障・人口問題研究所国際関係部 第2室長

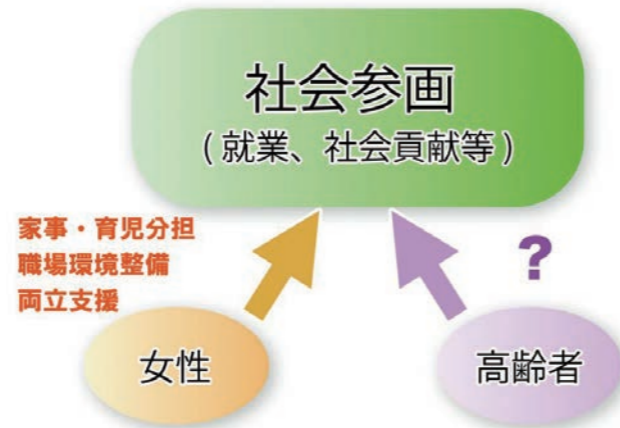
田中 慶子  
明治学院大学 社会学部附属研究所 研究員

Li Wenwen  
立教大学 社会学部 助教

渡邊 大輔  
成蹊大学 文学部 教授

西野 勇人  
東日本国際大学 健康福祉学部 専任講師

**研究概要**  
本計画研究班では、申請時の研究目的であり引き続き「生涯学」の重要なテーマである高年期の社会参加について、社会調査データをもとに探究することを主目的としている。ただしこの課題は2023年度に予定されている大規模調査を活用することになるため、今年度はそのための準備期間となる。幾度かの研究会を通じて、出生コーホートなどを組み入れたライフコース論を組み入れることで、既存研究と異なった視点から、社会参加の変化と現状、そして将来についての見通しを与えることがめざされる。また、生涯学の領域全体の目標



は「生涯観の刷新」であるが、本計画研究班では、この課題に直接に関連するデータの収集を今年度実施するインターネットモニター調査を通じて行う。人々はどんな「生涯観」を持っていて、それはその人が置かれた環境や人口学的特性(性別、出生年代、学歴など)に応じてどのくらい異なっているか。こういった、「生涯観」を考える上で必要な基礎データになることが期待される。

ウェルビーイング班(社会学)

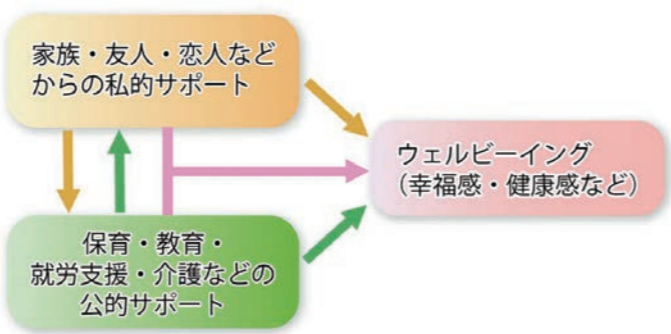
B02

ウェルビーイングの規定要因に関する実証的研究



**代表者**  
柴田 悠  
京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授

**研究概要**  
本研究では、本領域「生涯学」がめざす「豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明」とその成果の「社会実装」に向けて、現代日本社会における「豊かな人生」つまり「ウェルビーイング(幸福感・健康感など)の高い人生」の社会的要因をさぐる。具体的には、幼少期から青年期、壮年期、高齢期にかけて、ライフステージの各時期にどのような私的サポート(家族や友人など身近な人からのサポート)や公的サポート(保育・教育・就労支援・介護など)を受けることが、その後の人生でのウェルビー



ングにどのように影響するのかを検討する。そのために、生涯の各時期に受ける私的サポートと公的サポートを詳細に把握する、日本で初めての大規模な質問紙調査(ウェブ調査と郵送調査)を実施する。2021年にはウェブ調査を実施して分析を行った。その分析結果をふまえて、2023年には郵送調査を予定している。これらの調査により、どのような社会関係や支援が「ウェルビーイングの高い人生」をもたらすのかを検証し、実践的・政策的示唆を得ることをめざす。

技能発達班(文化人類学)

C01

技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究



**代表者**  
金子 守恵  
京都大学 アフリカ地域研究資料センター 准教授

**分担者**  
重田 眞義  
京都大学 アフリカ地域研究資料センター 特任教授

山越 言  
京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

伏木 香織  
大正大学 文学部 教授

座馬 耕一郎  
長野県看護大学 准教授

**研究概要**  
本研究は、アジアやアフリカ大陸に暮らす技能集団が身体を通じて暗黙知を体得する過程に焦点を当て、担い手たちの1) 生物学的発達を示す行動調査、2) 身体技法の習熟度、3) 発達段階の文化的制度化の相関性について精査し、文化人類学的な比較検証を行う。これまでは、アジアやアフリカのさまざまな地域に暮らす技能集団に見出される製作技術や演奏方法を描きだし、製作者が年齢や経験を重ねることによって技能を熟練させていくことを指摘してきた。その一方で、作りだされたものやその技術が、製作者の年齢や経験



■参照フィールド ●連携フィールド

とは関わりなく、周囲の人々から評価されていることもあきらかになっている。技能の習熟とは、製作者が特定の身体の動かし方を会得する過程であると同時に、彼女ら/彼らの人格形成にも影響を与える営みであることが示唆されている。引き続き技能集団に注目して、多元的な発達過程を描き出し、「生涯学」がめざす従来の生涯観を刷新することをめざす。

ヒトモノ班(文化人類学)

C02

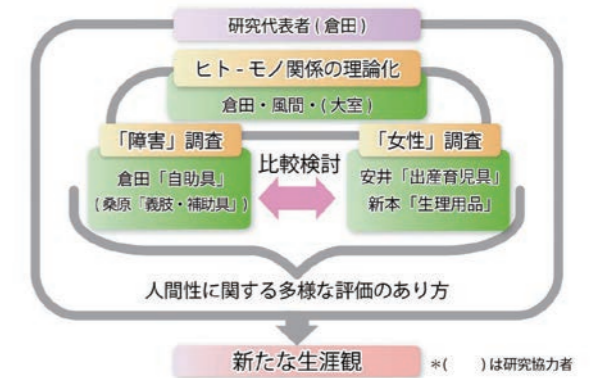
生涯を通じたヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究



**代表者**  
倉田 誠  
東京医科大学 医学部 准教授

**研究概要**  
本研究班では、日本やオセアニアの諸社会において身体や認知の障害を軽減したり、性差による生理的变化や社会的役割に対応したりする際に使用・装用される様々なモノに着目し、1)それらが社会に導入され個々の身体に馴染んでゆく過程、2)それらを用

いる人びとの用法や動作の変化、3)それらを身につけ用いながら生きてゆくことに対する社会的評価、を行動観察やインタビューを主とした継続的な調査によって明らかにする。コロナ・パンデミックによって海外調査の実施が困難な状況のなかで、本班はこれまで国内での共同調査を中心にデータや知見の収集とそれらの検討を行ってきた。今後は、研究分担者・協力者が各自のフィールドにおいて海外調査を実施するとともに、国内調査で構築した基盤を活かして「生涯学」の社会実装の可能性を探ってゆく予定である。



**分担者**  
風間 計博  
京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授

安井 眞奈美  
国際日本文化研究センター 教授

新本 万里子  
広島市立大学 客員研究員

紺屋 あかり  
明治学院大学 国際学部 専任講師

山本 健太  
神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 助教

佐野 文哉  
人間文化研究機構 人間文化研究創発センター 研究員/京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 客員研究員

佐本 英規  
筑波大学 人文社会系 助教

飯嶋 秀治  
九州大学 人間環境学研究院 准教授

四條 真也  
関東学院大学 国際文化学部 専任講師

## 社会教育班(教育学)

DO1

### 生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証



代表者  
**石井山竜平**

東北大学大学院 教育学研究科 准教授

分担者

- 上田孝典 筑波大学 人間系 准教授
- 李正連 東京大学大学院 教育学研究科 教授
- 上野景三 西九州大学 子ども学部 教授
- 山口香苗 秋田大学 教育文化学部 専任講師
- 西川一弘 和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 准教授
- 小山竜司 神奈川大学 法学部 教授

#### 研究概要

本研究の目的は、1)一連の計画研究から得られた知見を、各自自治体の社会教育・生涯学習の担当者や教職員向けの講習・研修、およびこれからの生涯学習計画にパイロット的に実装することにある。並行して、2)東アジアと日本における生涯学習政策・実践を比較検証しつつ、3)地域主導

の生涯発達支援や、地域人材育成計画の新展開に加担していくことで、政策と実践の双方への実装を目指す。社会実装をめぐることは、2021・22年度、東北大学社会教育主事講習に生涯学習に関する授業を導入。加えて、自治体職員有志と学習会を行い、社会実装の可能性を検討中。「日本の生涯

学習政策検証」班は、2022年1月(東北大)及び8月(南三陸)、当時の政策の中核者と、当時政策を批判的に分析していた研究者との対話を仕掛け、重ねている。「東アジア」班は、23年11月、中国・韓国・台湾から参加を得て「東アジア生涯学習研究フォーラム」を沖縄・名護にて開催。



- 松本大 東北大学大学院 教育学研究科 准教授
- 大安喜一 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 教育協力部長
- 新保敦子 早稲田大学 教育・総合科学学 教授
- 呉世蓮 関東学院大学 国際文化学部 専任講師
- 寺脇研 星槎大学 客員教授

## 総括班

### 生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新



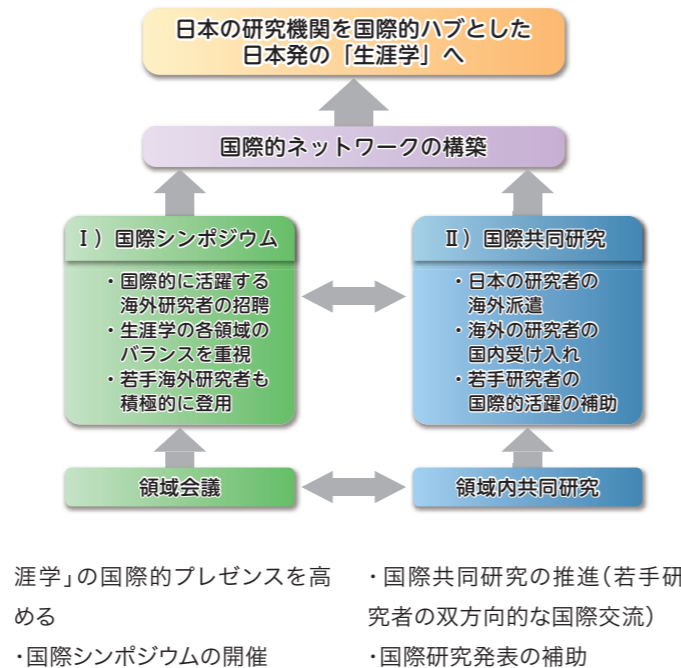
代表者  
**月浦 崇**

京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授

#### 研究概要

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な生涯観を刷新し、その成果を社会へ還元していくことをめざしている。そのために、総括班では以下の3つの方策を推進する。

- 1) 定説を打ち破り、新たな「生涯観」を提唱する
  - ・領域代表者による各計画研究のマネジメント支援
  - ・若手研究者に多くのチャンスを与えるような公募体制の構築
- 2) 多様な研究領域を連携・融合する
  - ・年2回の領域会議の開催
  - ・領域内交流プログラムの運営
- 3) 新しい研究領域としての「生



## 公募研究班一覽

### A04 脳とこころのメカニズムに関する心理学的研究



A04-L201

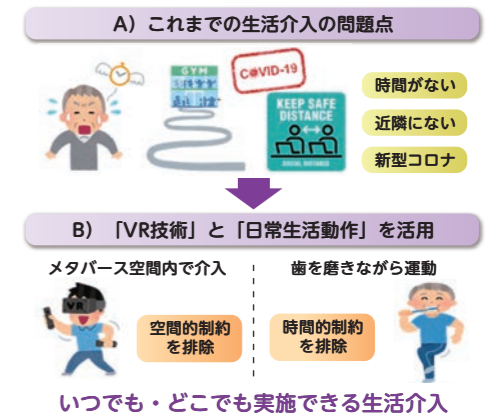
野内類

人間環境大学 総合心理学部 教授

#### 高齢者の認知機能を改善させるシームレス生活介入技術の開発と実証

高齢者の認知機能を向上させる個人に最適化された生活介入の提供と効果検証には大きな関心が寄せられている。ところが、認知・運動介入プログラムを実施している施設が近隣になく(空間的制約)、実施する時間・暇がないために(時間的制約)、現状では、生活介入プログラムを実施していない高齢者がほとんどである。そこで、本研究は、a)空間的制約を排除できる仮想現実内でメタバース認知・運動介入やb)時間的制約を排除できる

ように歯磨きや料理などの日常生活動作の中に生活介入の要素を組み込んだデイリー認知・運動介入を開発しつつでも・どこでも実施できるシームレス生活介入による認知症予防を確立することを目指す。



A04-L202

原田悦子

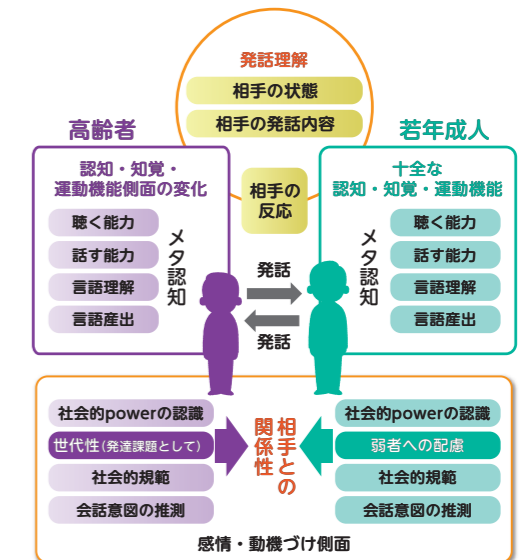
筑波大学 人間系 教授

#### 高齢者と若年成人の会話——高次認知機能としてのレジリエント性解明と認知モデリング

本研究では、認知的加齢研究の中で、健康な加齢による機能低下が見られない領域とされる言語領域でも、実活動の中で観察される「対話」では何らかの加齢による変化があること、しかしそれは単純な課題達成低下でなく、複雑な多様性を持つ現象と考えられることから、そうした変化を「外的攪乱要因に対して柔軟な対応を取ることで、目的とされている実現すべき機能を維持し続ける」レジリエント特性(Hollnagel, 2010)という枠組でとらえることを試みる。

これまでの特に高齢者内の機能変化に対応するレジリエントな特性、例えばアボガドという語が「想起できない」状況で「この前の飲み会で出てきた、醤油つけて食べた、緑のやつ」といった表現を取るような「話し続けるための柔軟な対応」としての特異現象と

象と考えて検討を試みた。しかしこうした特異な会話現象は、高齢者と若年成人との対話に多く見られることから、高齢者側の何らかの変化に対して、会話相手である若年成人がレジリエントに「会話の形式を変化させ」、その結果、高齢者の会話が特異的なものになると考え、高齢者と若年成人との異世代間会話を対象として、会話のモデル化を試みる。







A04-L203

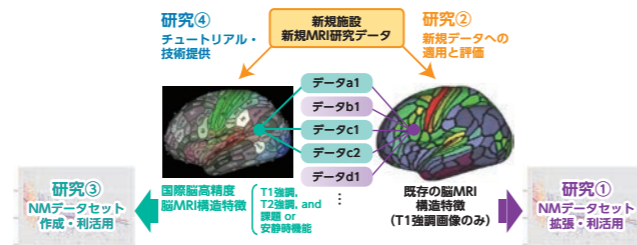
小池進介

東京大学大学院 総合文化研究科 准教授

## 生涯にわたる大規模脳構造画像データセットを利活用した新たな脳画像解析手法の提案

磁気共鳴画像(MRI)を用いた脳構造・機能画像解析が一般的となったが、A)少ないサンプルサイズ、B)計測パラメータや前処理方法の違い、C)妥当性・信頼性の担保、D)年齢、性別などの非線形な影響、といった問題が明らかとなり、脳MRI研究を新規に立ち上げることはより困難となってきた。本研究では、前回公募班で完成した10~80歳3,000計測のライフコースにわたる非線形な発達・加齢変化のデータから標準発達・加齢モデ

ル(Normative Modeling; NM)を抽出する。大規模NMデータを用いて、小規模MRI研究結果の妥当性・信頼性を担保する試みを行う。そのために、研究①既存の大規模NMデータの拡張と利活用、研究②大規模NMデータに新たな小規模脳画像データを組み合わせる技術開発、研究③新規プロトコルデータの蓄積による精緻な大規模NMデータセットの作成と利活用、研究④これらの技術開発を若手・未経験の研究者が利活用できるチュートリアルの実施と技術提供を行う。



A04-L205

木村亮

京都大学大学院 医学研究科 准教授

## エピゲノム制御によるプレジジョンエイジングを目指す神経発達症の加齢研究

本研究の目的は、ライフスタイルに伴う腸内細菌叢変化とDNAメチル化を基にした「生物学的年齢」から、神経発達症の加齢の個人差の原因を明らかにすることである。私たちはこれまでの

研究で、自閉スペクトラム症やそれとは逆の高い社交性を呈するウィリアムズ症候群では、「生物学的年齢」が加速することを発見してきた。しかしこれら神経発達症では、なぜ加齢が加速するのか、なぜ加齢の程度に個人差がみられるのかは不明である。さらに、加齢の加速に伴って認知行動特性がどのように変化するかも十分明らかになっていない。そこで本研究では、質問紙やウェアラブルツールによる症状評価と腸内細菌叢組成、「生物学的年齢」とを組み合わせることにより、生活習慣と加齢の個人差との関係を明らかにする。本研究の結果は、神経発達症への食事や運動による介入や支援の立案に貢献するだけでなく、将来的には老化を遅らせたり、特性改善へと発展することが期待される。



A04-L204

鈴木敦命

東京大学大学院 人文社会系研究科(文学部) 准教授

## 直感的信頼の高齢者優位性——国や実験課題・分析法を越えた頑健性に関する検討

本研究は、他者が信頼できるか否かの直感的判断(直感的信頼)において、高齢者が若年者や中年者に比べて優れているという研究知見の頑健性を検討する。人間には他者の信頼性を顔や声などの知覚の手がかりから直感的に判断する傾向がある。研究代表者は、顔に基づく直感的信頼の年齢関連差を調べる研究を最近行い、高齢者の直感的信頼が中年者・若年者に比べて優れる(正確性が高く、バイアスが小さい)ことを示す結果を得た(鈴木・石川・大久保, 2022)。この研究知見は、社会的認知の加齢に伴う向上を示唆するものである。ただし、鈴木他(2022)は、日本人の顔刺激・参加者集団だけを対象とし、信号検出理論に基づく最も単純な分析を用いていた。そのため、得られた結果が種々の要因(顔写真、参加者集団、課題・分析

方法など)の変動によらず頑健に観測できるかは不明である。そこで、本研究では、直感的信頼の高齢者優位性が上記諸要因の変動によらず頑健に観測できるかを明らかにする。なお、本研究には、専修大学教授の大久保圭氏、同助教の石川健太氏、日本学術振興会特別研究員の河原美彩子氏が研究協力者として参画する。

The infographic is divided into three sections:
 

- 背景 (Background):** Discusses the intuitive trust of older adults. It notes that while older adults are generally more accurate and less biased than younger/mid-aged adults, the social cognitive ability to improve with age is a question. It lists key findings: '直感的信頼の高齢者優位性を観測' (Observed intuitive trust superiority of older adults), '●正確性が高齢者>中年者>若年者' (Accuracy: older > middle > younger), and '●バイアスが高齢者<中年者<若年者' (Bias: older < middle < younger).
- 問題 (Question):** '直感的信頼の高齢者優位性の頑健性' (Robustness of intuitive trust superiority of older adults). The question is whether this superiority is consistent across different countries/experimental tasks and analysis methods.
- 本研究 (This Study):** '研究 I 国・分析法を越えた頑健性' (Research I: Robustness across countries and analysis methods) and '研究 II 実験課題を越えた頑健性' (Research II: Robustness across experimental tasks). A 2x2 matrix shows results for '判断' (Judgment) and '信頼' (Trust). For '判断', '信頼できる' (Reliable) is '正確' (Correct) and '信頼できない' (Unreliable) is '不正解' (Incorrect). For '信頼', '信頼できる' (Reliable) is '不正解' (Incorrect) and '信頼できない' (Unreliable) is '正確' (Correct). The matrix also indicates 'インセンティブのある課題の使用' (Use of tasks with incentives).



A04-L206

石原暢

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 助教

## 身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的基盤の解明

身体を健康に保つライフスタイルは、脳老化の減速と関わることを示されている。例えば、習慣的運動に伴う体力の向上は、中高齢期の脳老化の減速と関わる。一方で、過度な座位時間、喫煙、睡眠不足、肥満、高血圧は脳老化の加速と関わる。それでは、これらの身体的健康要因は、どのような分子生物学的メカニ

ムで脳の老化と関わるのだろうか? 本公募研究では、DNAメチル化の役割に着目し、身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的メカニズムを調べることを目的とする。この目的を達成するために、身体的健康指標(過去・現在の運動習慣、身体活動量、睡眠習慣、喫煙習慣、体組成、肥満度、筋力など)と磁気共鳴画像法を用いて取得した脳画像データ(脳容量、大脳皮質の髄鞘密度、神経突起密度と方向散乱、構造的・機能的領域間結合など)の関係を調べ、それらの関係を媒介する唾液DNAメチル化指標を同定する。本研究の成果を通して、どの身体的健康指標がどのDNAメチル化指標に媒介されて脳の老化と関わるのかが明らかになれば、将来的には唾液から各個人の脳老化予防に効果的な生活習慣をフィードバックする取り組みに発展することが期待される。



A04-L207

石井礼花

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的・発達障害研究部 室長

## 更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明——サポートシステム構築に向けて

40歳以降に初めて出産して母親になる、また更年期に12歳以下の子供を養育する女性が増えている。しかし、更年期が育児に与える影響についてはまだ国際的にもほとんど検討されて来なかった。更年期の女性についての精神的な問題に関連する要因として、空の巣症候群といった育児の終わりによる影響を挙げている研究はあるが、12歳以下の育児そのものを調べている研究は、非常に少ない。また更年期の脳神経基盤に与える影響については、エストロゲンレセプターの分布する前頭葉、視床、視床下部、扁桃核、前脳基底部、後帯状回の機能や形態変化に

つながることが指摘され、更年期の精神症状や認知機能変化に関連すると言われている。これらの場所は、育児に影響を与える感情や愛着に関連する脳部位であるにも関わらず、更年期が育児に影響することに関する脳神経基盤の報告はない。そこで、本研究では、更年期における育児(12歳以下)の実態把握と脳神経基盤に与える影響、母子の愛着形成に与える影響を解明し、更年期の育児サポートシステムの開発を行うことを目的とする。そのために、実態把握のためのインタビューおよび、磁気共鳴画像を用いた脳画像研究を行い、それらの結果をもとに更年期の母向けのペアレントトレーニングを中心とした新しいサポートシステムを構築する。ペアレントトレーニングは、ポジティブな養育行動(ほめる、注目を与えるなど)を増やすための方略が実践的に学べるため、更年期の母に有効なサポート体制である可能性が考えられる。本研究では、今まで、国際的にも検討されてこなかった、更年期における育児(12歳以下)とその脳神経基盤への影響にスポットライトをあて、母子の愛着形成について生物学的なメカニズムを解明し、更年期の育児に対する支援を開発する。更年期の

育児の大変さだけでなく、40代以降の育児だからこそのポジティブな側面も明らかにする。  
本研究の成果により、更年期の母と児のWell-beingの促進だ

けでなく、社会全体での更年期以降の育児の新たな価値への気づきの増進が期待される。

### B03 社会的環境とそこに置かれた個人の生活に関する社会学的研究



B03-L201

笠井賢紀

慶應義塾大学 法学部(三田) 准教授

#### 高齢者の地域社会貢献活動についての社会学的研究——地域史と人生史の分析を通じて

縮小・高齢社会においても、地方の地域社会は一定のレジリエンスを有している。ここで、高齢者は地域社会の主体的担い手としてそのレジリエンスに貢献するものと考えられる。

本研究の目的は「主に70歳代半ばの高齢者たちの生活経験を地域社会との関わりという観点から分析し、それぞれの地域社会のコミュニティ特性が高齢者の活動にどのような影響を与えるかを明らかにすること」である。

本研究の独自性と創造性は、高齢者の生活経験が今後の社会に有用な資源として活用可能であるという視角に加え、社会調査の方法によってもたらされる。本研究は質的混合社会調査を採用する。特に、高齢者の生活経験を分析する際、生活史調査としてのインタビューが適切な手法として採用できる。一人の人生を丹念に聞き取ることで、あるいは、多くの生活史を束ねて

いくことで、高い水準の社会分析が可能なのは、先行研究からも明らかであり、本研究でもこの手法を採用する。

現在の高齢者たちは地域社会における共同性・地域性といったコミュニティ特性を幼年・少年期に経験していることにより現在も活発な活動ができていて、加えて、そうした経験を生むための地域社会別の工夫が準備されていることへの気づきを得て、本研究の着想に至った。そうした地域社会別の工夫あるいは仕掛けについて、地域社会がいくつもの可能な方法から選択の上でアレンジを加えて活用し、かつ、多様な価値観の者たちの地域社会における共生に貢献しているという点から、応募者は「共生社会のレパトリー」と呼んでいる。共生社会のレパトリーを活かしながらコミュニティが維持されるためには、外的な変動を経験した場合においても、人びとの価値観や生活様式はそれに連動して即座に変動するのではなく、部分的にせよ保持されなければならない。外的状況の変動には産業構造、文化、社会規範、経済状況などがある。

そうした外的状況の多様性に注しつつ地域社会のコミュニティ特性と高齢者の地域社会貢献活動との連関を分析するべく、「旧街道筋の伝統的地域社会」、「1970年代造成のニュータウン」、「旧鉱業/現酪農・漁業村落」という三様の3地域について扱う。

### C03 多様な生涯観を生み出す社会文化的な基盤に関する文化人類学的研究



C03-L201

岩瀬裕子

東京都立大学大学院 人文科学研究科 博士 研究員

#### 密着した身体接触を続ける中間集団の生涯観——超高齢化するスペイン・カタルーニャから

ワシントン大学保健指標評価研究所 (IHME) によると、スペインは2040年までに平均寿命が85.8歳になり、日本を抜いて世界一の長寿国になる見込みである。そのスペインの中で平均寿命が高い地域の一つが独立運動の根強いカタルーニャであり、国家と個人をつなぐ互助的な中間集団が数多く存在する先進地である。研究代表者は、そのカタルーニャの祭礼において、密着した身体接触によって「人間の塔(Castells)」を造り続ける人びとの多様な身体感覚をもとにした相互理解のありかたにつ

いて研究を進めてきた。本研究では、そのありかたと日頃の社会関係との関連性をフィールドワークと参与観察によって調査し、継続した密接相による身体接触がいかに人びとの「生涯観」の形成に影響を与えているかを明らかにする。本計画は、新型コロナウイルスの影響もあいまって忌避される傾向が強い「身体接触を特徴とする中間集団」における「生涯観」の解明を通して、生理学的・生体力学的・心理学的な運動原理や機構を扱う身体運動科学領域などとの共同研究を促進するとともに、本研究領域が推進する「多様な生涯観に基づく柔軟で多様な超高齢社会の実現」に貢献する。



C03-L202

丹羽朋子

国際ファッション専門職大学 国際ファッション学部 講師

#### 成熟・再生する職人仕事の人類学的研究——染織業における人・モノ・環境の連環を事例に

科学テクノロジーが発展・普遍化し、肉体及び知的労働の機械化(外部化・自動化)が加速する現代社会では、これまで自明視されてきた「人間とは何か」が問い直され、既存の労働観、生涯観もまた更新を迫られている。また、本研究で主に扱う染織業やファッション産業では、地球環境問題やグローバル経済下の労働搾取等が深刻化する中で、SDGsに配慮したサステナブル・ファッションへの移行、循環経済型の産業構造転換に向けた試行錯誤が続けられている。このような現代の高度なテクノロジー社会や持続可能性の危機に直面する現代世界で、生身の人間が自らの身体と素材、(ある種の機械を含む)道具とを対話させつつものづくりをする「職人仕事」、その手問ひまをかけ技術や知を習得・成熟させていく経験は、我々にとっていかなる触発的な意味をもち得るだろうか?

本研究ではこの大きな問いを念頭に置き、人と各種の道具や機械、環境との交差・連環が見られる国内外の染織を中心とする職人仕事の革新的な事例を対象に、人類学な調査研究を行う。現代的な要請に沿いながら進行しつつある職人仕事を、多角的なエコシステムの結節点として考察する作業を通じ、技術を習得し熟練していく「職人の生」における発達変化と共に、染織に使われる植物や生物、新旧の織機等の「素材や道具の生」、産業を支える「地域や自然環境の生」等も視野に入れ、それらが各様の仕方と時間性をもって「成熟」し、老いて修繕を要したり、「再生」して次世代に継承され持続していく過程に焦点を当てる。本研究の特徴は第一に、人・モノ・環境等の多様な行為主体の「ライフサイクル」がもつれ合い、連環するプロセスを焦点化する研究視角にある。第二に、今まさに変革の最中にある染織業の現場の人類学的フィールドワークと、かつての職人仕事を記録した地域資料や旧西ドイツで制作された民族学映像アーカイブ(ECフィルム)等の文字や映像資料の分析とを組み合わせ、通時的・通文化的な比較研究を行うことにある。「手で考える」職人仕事の考察に脱人間中心主義の人類学を導入し、通文化的な技術文化研究をより多角的で広い射程をもつ研究へと拡張・更新すること、そこで得られた知見をもって人間の生のあり方を多角的に問い直す「生涯学」の構築に寄与したいと考えている。

E01 A01 A02 A03 B01 B02 C01 C02 D01 **の境界領域に関する研究**



E01-L201

**坂井さゆり**

新潟大学 医歯学系 教授

**認知症高齢者のがんサバイバーシップを支える緩和ケア看護学の創出**

日本人の2人に1人はがんに罹患し、認知症の有病者数が約700万人になるという推計がある。超高齢社会の看護ケアは、従来の概念を超え、対象の連続性と生涯発達を捉える視点を強化することが重要な課題となる。本研究計画は「認知症高齢者

のがんサバイバーシップを支える緩和ケア看護学の創出——無治療でも豊かな生涯を送れる社会のために」を主題とし、認知症とがんを共にもつ後期高齢者(がんの無治療選択者)に対する緩和ケアの実態を、匿名診療情報等関連資料、アンケートとインタビュー調査を用いた後ろ向き研究により明らかにするものである。人間は、認知症やがんという病いや超高齢による老いであっても、環境因子を整えることで、最期まで多様な成長と変容を繰り返す生涯発達を遂げ、世代を超えた何かを継承していくと考える。本研究は、その環境因子としての緩和ケアの実態を質的・量的に明確にし、人間が最期まで発達し続ける生涯観を創出する。



E01-L202

**松永篤知**

金沢大学 資料館 特任助教

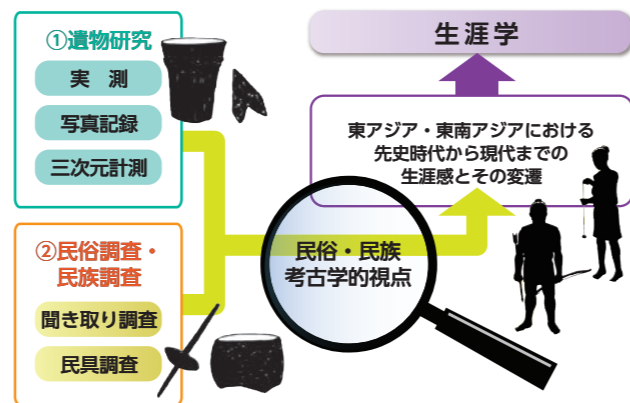
**民俗・民族考古学的視点から見た東アジア・東南アジアの人々の生涯**

人間の生涯は、社会との相互作用の中で多様に変化するものであるが、時代によっても変わり得る。人間の生涯の本質を真に理解するには、現代人だけでなく、考古学の対象となるような、過去の人々の生涯も理解する必要がある。

ただ、一般的な考古学では、研究対象となる遺物はあくまでも静的なモノであり、人間の生涯の具体的な動的イメージに欠ける部分がある。それを補うのが、民俗考古学(folklore archaeology)や民族考古学(ethnoarchaeology)という、文化人類学の近縁研究である。

そこで、本研究では、過去と現代の生涯観の共通点・相違点を民俗・民族考古学的視点で明らかにした上で、人間の生涯観がどのような変遷を遂げて来たのかを社会的・文化的に解明する

ことを目的とする。過去の人々の生涯に関して、よりリアルな生活復元を成し遂げるには、民俗・民族調査を積極的に導入した考古学的研究をする必要がある。具体的には、①遺物研究、②民俗調査・民族調査を2か年計画で実施し、その成果を民俗・民族考古学的視点で統合し、東アジア・東南アジアにおける先史時代から現代までの生涯観とその変遷を解明する。



E01-L203

**松本卓也**

信州大学 学術研究院理学系 助教

**野生チンパンジー社会における高齢個体の生き様——人口動態と行動観察による再定位**

ヒトの生活史の特徴に、閉経と長寿が挙げられる。一方、ヒトに最も遺伝的に近縁なチンパンジーの長期野外調査により、チンパンジー社会における高齢個体の存在が明らかになった。本研究課題では、55年以上にわたって調査が継続されているタンザニア連合共和国・マハレ山塊国立公園の野生チンパンジーを対象に、チンパンジーの高齢個体と他個体とのやりとりを雌雄ごとに詳細に記述する。そして、①高齢メスが娘の子育てを支援するか(「祖母仮説」の検証)、②高齢オスが自身の子や孫に対して選択的に狩猟した肉の分配などを行うか(高齢オスの役割解明)、を行動学的に検証する。さらに、高齢個体が包括適応度の

上昇に寄与するかを、55年分の人口動態データを用いて検証する。本研究では、チンパンジーの高齢個体の生き様を、従来の野生動物研究で論じられてきた「衰退していく存在」としてではなく、「社会と関わり、高齢個体ならではの関係性を構築する存在」として初めて浮き彫りにしようとするものである。今後、主にヒトを対象とした文化人類学的、心理学的研究を推進している「生涯学」領域の研究者との学術交流を通じて、現象の種間比較と進化的生物学的な視点の導入という新しい方法論を提供していきたい。



E01-L204

**北崎充晃**

豊橋技術科学大学大学院 工学(系) 研究科(研究院) 教授

**年齢を超えて誰もが自由自在に歩いてコミュニケーションできるメタバース**

人にとって、自らの意思で歩いて自由自在に動き回れることは、心身の健康にとって大きな意味を持つ。しかし、高齢者になるにつれて、足腰の筋肉が弱くなり、また平衡機能(前庭感覚)の低下とともに運動指令と実際の四肢の運動が一致しなくなり、歩行が困難になることが、高齢者の心身の健康に悪影響をもたらしている。本研究の目的は、バーチャルリアリティとメタバースを用いて年齢や環境、身体能力を超えて自由自在な歩行を実現し、それによる心身への健康効果を検討し、複数人のコミュニケーションを実現する環境を構築し評価することである。高齢者の

歩行について物理的・身体的な機能の回復や増幅を目指すのではなく、そのままの物理的身体を受け入れ、同時にVRとメタバースを用いてもう1つの身体でバーチャル歩行を実現することで自己効力感を増幅する。さらに、メタバースにより高齢者のユーザーが新しいコミュニケーション能力と環境を獲得し、孤独の低減を目指す。





E01-L205

近藤祥司

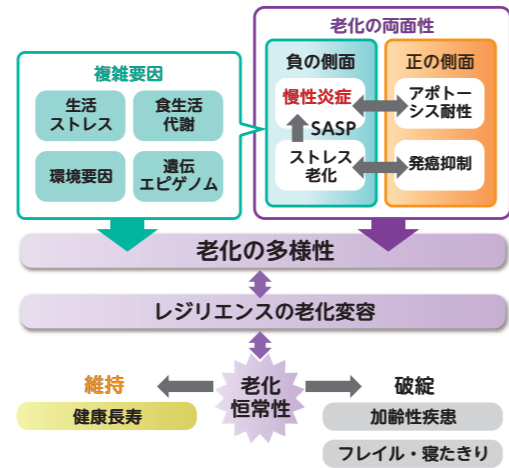
京都大学大学院 医学研究科 准教授

## 老化変容レジレンスの修復による老化新健康概念の創出

「生涯学」では、社会の高齢化によって顕在化しつつある疾病（フレイルや加齢性変化）の原因として、「老化レジレンスの変容」も注目される。我々は長年「老化と代謝」の観点から解糖系代謝・メタボライト研究に従事する過程で、老化レジリエンス変容の一つとして、解糖系異常蛋白連関や老化メタボライトに気付いた。本計画の目的は、「老化に伴う代謝レジリエンス変容機構の解明とその応用」である。我々は長年、「解糖系酵素ホスホグリセリン酸ムターゼPGAMと老化連関」を研究してきた。解糖系代謝は特に炎症や癌細胞で解糖系亢進する。しかし他の解糖系酵素同様に、PGAMは生育に必須であり、酵素活性阻害薬は、実用化されていない。最近我々は、PGAMの「非酵素活性」を見

出した。

メタボローム共同研究も沖縄科学技術大学院大学柳田充弘教授と開始した。独自にヒト全血メタボローム解析法を開発し、老化関連メタボライト(老化、飢餓、フレイル/サルコペニア、認知症)を精力的に同定し、報告した。これらシーズを基盤に、「老化変容レジレンスの修復による健康維持」という老化新健康概念の創出を目指す。



引き起こしている可能性についてはあまり検討されていない。本研究では住民ベースの健康診断のフィールドにおいて、更年期ステージの女性の更年期症状およびメンタルヘルス、生活習慣病の実態を調べ、各種栄養素のバイオマーカーを追加測定することにより、鉄欠乏を中心とした栄養素不足を含む身体的特性およびライフスタイルと更年期症状との関連を横断的に検討する。また患者報告アウトカム(patient-reported outcome; PRO)記録機能を搭載したスマートフォンアプリを用いて個々の属性情報、日々の症状、行動データ等を収集し、集積したデータと健康診断データを機械学習・深層学習に基づいたAIアルゴリズムを用いて分析することで、効果的な個別化ライフスタイル介入の開発を目指す。これらにより、人生100年時代を生きる女性たちの生涯をかけた自己実現を可能にする「自律的な健康管理法」を提案する礎を築く。



E01-L206

江川美保

京都大学大学院 医学研究科 助教

## 更年期の鉄欠乏とメンタル不調の関連——女性ホルモンの衰退に抗わない予防医学の開拓

50歳ごろの閉経をはさむ前後10年間の更年期に女性が高頻度で経験するメンタルヘルス不調の主因は女性ホルモンの衰退や同時期の精神的ストレスであるというのが従来の定説である。一方で、初経以来およそ40年間月経を繰り返す女性において更年期に至るまでに進行する、気付かれていない「鉄欠乏」を中心とする質的な栄養素不足の状態が多様な心身の更年期症状を



E01-L207

坂野晴彦

京都大学大学院 医学研究科 准教授

## 未病を在宅で検知する——デジタルバイオマーカーによる「身体天気予報」

2025年には、本邦において約700万人(高齢者の約5人に1人)が認知症になると予測されている(内閣府・平成29年度高

カー開発は、未病検知のための有用な手段と考えられる。

認知症のデジタルバイオマーカーとして、現在多くの提案があるもののgold standardとして確立されたものはない。日常生活から異常を検知する手法を確立できれば、認知症に限らず、生活習慣病や精神疾患といった疾病の予防や、健康維持の新たな手法につながる。

本研究では、デジタルデバイスを用いた解析から、在宅で軽度認知機能障害などの未病を検知するデジタルバイオマーカーを抽出する。さらに、質問紙を用いた心身の軽度の不調とデジタルデバイスを用いて受動的に得られる情報とを比較検討することで、未病につながる心身の不調と関連するデジタルバイオマーカーを探索する。

具体的には、磁気センサ型指タッピング装置(指タップ)やウェ



E01-L208

権藤恭之

大阪大学大学院 人間科学研究科 教授

## 加齢の様態モデル検証のための大規模ハーモナイズドデータベース構築法の確立

人の加齢は、身体・生物学、認知・感情、社会・環境の3つの領域が相互に影響しながら生じる長期間の変化である。したがって加齢の様態をモデル化するには、これら3つの領域を経時的に同時に長期間評価し、領域相互の影響と変化の関係を解明することが必要となる。

そこで本研究は、生涯学公募班研究で行ってきた、異なった縦断調査のデータを同じ枠組みで分析可能とするデータハーモナイズを課題①既存のデータを用いて新たに、質問項目への反応パターンから認知機能を評価する方法の開発、課題②IRTを用いて感情・幸福感尺度の重みパラメータの同定によってハーモナイズを可能にするという方法で拡張発展させる。最終的にはその成果を、すでにデータ収集が終了している、縦断調査データに適用し、加齢の様態の包括的なモデルの検証を行う。さらに、本研究で得られた成果から生涯学研究に利用可能な標準項目群として提供可能な形に整備する。

本研究は2年間の期間で3つのプロジェクトを並行して行う。

プロジェクト1は、NILS-LSAとSONICの縦断データのハーモ

ナイズ作業を拡張する。公募研究では認知・感情と環境領域にのみ注目してきたが、これに加えて身体・生物学(視聴覚機能・身体機能・生化学指標)および社会的領域(家族、地域の評価)のハーモナイズを進め、その方法論をプロジェクト2と3に転用する。

プロジェクト2は、申請者がすでに収集したデータ、収集に関与したデータおよび公開データを用いて、質問紙に対する回答パターンから認知機能を推計する方法を開発する。これらの調査の一部は、認知機能のアセスメントも同時に実施しており、回答パターンから得られた推計値と実測値を用いて妥当性の検討が可能である。

プロジェクト3は、本研究で得られたハーモナイズドデータを利用して3つの領域にかかわる変数群を評価するための標準化した設問群を構築する。複数の研究間で類似の概念を測定していても、設問が微妙に異なるため、相互に参照することは困難である。本研究では、幸福感、精神的健康、うつ、肯定的、否定的感情の領域で利用される代表的な質問項目群を収集し、WEB調査および対面調査を行い、IRTによる等価の手続きを使い、各項目の重みづけパラメータを算出し、選択された項目群による各領域の得点計算を可能にする。

近年加齢だけでなく、死亡までの時間が個人の認知機能や心理的状態に影響する要因として注目されている。そこで、測定時から死亡までの時間を分析することを可能にするためにこれらのプロジェクトと並行して、既存の調査参加者の転記調査を行い、死亡年月日等の同定を行う。

近年加齢だけでなく、死亡までの時間が個人の認知機能や心理的状態に影響する要因として注目されている。そこで、測定時から死亡までの時間を分析することを可能にするためにこれらのプロジェクトと並行して、既存の調査参加者の転記調査を行い、死亡年月日等の同定を行う。

近年加齢だけでなく、死亡までの時間が個人の認知機能や心理的状態に影響する要因として注目されている。そこで、測定時から死亡までの時間を分析することを可能にするためにこれらのプロジェクトと並行して、既存の調査参加者の転記調査を行い、死亡年月日等の同定を行う。

近年加齢だけでなく、死亡までの時間が個人の認知機能や心理的状態に影響する要因として注目されている。そこで、測定時から死亡までの時間を分析することを可能にするためにこれらのプロジェクトと並行して、既存の調査参加者の転記調査を行い、死亡年月日等の同定を行う。

領域  
全体

## アウトリーチ活動「公開シンポジウム」開催報告

報告：筒井淳也 (B01高年社会参加班 研究代表者/立命館大学)

コメンテーターを配置し、一般参加者をまじえて討議を行いました。生涯学の領域特性として、異分野の研究者が同一のテーマについて知見を寄せ合うということがあり、公開シンポジウムでもそれぞれの分野の知識を絡み合わせる討議が行われました。

一般参加者には研究職のほか、行政や民間企業などさまざまな人たちが入り、また参加人数も多く、プロジェクトについて広く知っていただくという目的を十分に果たしてきたと言えます。

以下、これまで3回実施された公開シンポジウムの概要をまとめます。

生涯学プロジェクトでは、2021年度より毎年、アウトリーチ活動として公開シンポジウムを実施してきました。プロジェクト外からゲストスピーカーを招聘し、生涯学に関連するテーマで特別講演を依頼しました。生涯学プロジェクトの領域が主に心理学、社会学、文化人類学、教育学によって構成されていることに対応して、第一回目(2021年度)は社会学分野から、第二回目(2022年度)は心理学分野から、第三回目(2023年度)は人類学分野からゲストスピーカーを招聘しました。

さらに、各回では生涯学領域メンバーからも講演者あるいは

### 2021年11月20日(土)

#### 「生涯学」がめざす新しい超高齢社会

特別講演

「人生の選択肢は増やせるのか？ 生涯学への期待」  
宮本太郎(中央大学法学部教授、北海道大学名誉教授)

講演

松井三枝(B03臨床心理班 研究代表者/金沢大学)、筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者/立命館大学)、倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者/東京医科大学)

オンライン

申込者：427名  
参加者：201名  
見逃し配信あり



### 2022年11月5日(土)

#### 「生涯学」の挑戦——高次脳機能障害から見える新しい生涯学

特別講演

「ヒトの脳のはたらきは加齢や脳損傷でどう変化するのか」  
鈴木匡子(東北大学)

コメンテーター：倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者/東京医科大学)、柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者/京都大学)、朴白順(A02生理心理班 研究分担者/京都大学(当時。現弘前大学))

京都大学芝蘭会館 ハイブリッド

申込者：511名(対面45名/オンライン466名)  
参加者：284名(対面32名/オンライン252名)  
見逃し配信あり



### 2023年11月18日(土)

#### 「生涯学」の展開——脱毛から身体と社会の関係を考える

特別講演

「21世紀の理想の身体——人類学を使って脱毛が権利になる社会を想像する」  
磯野真穂(人類学者)

コメンテーター：日高聡太(A01知覚・認知心理班 研究分担者/上智大学)、安元佐織(公募B03-L101班 研究代表者/大阪大学)、桑原牧子(金城学院大学)

京都大学国際科学イノベーション棟 ハイブリッド

申込者：293名(対面39名/オンライン254名)  
参加者：161名(対面17名/オンライン144名)  
見逃し配信あり



E01-L209

大澤博隆

慶應義塾大学 理工学部(矢上) 准教授

### サイエンス・フィクションが示唆する未来の発達・加齢観の分析

本研究では、科学技術と社会の関係を描いてきたサイエンスフィクション(SF)が、技術発達や社会変化に伴う人々の発達・加齢観の変化をどのように描き伝えてきたかを分析し、その成果を今後どのように活用するかを検討する。SFのもたらす想像力は、我々の現代社会の重要な構成要素であり、将来像を駆動させる要因となっている。特に人々の生活を支え、ライフスタイル自体を変更させる力を持つ、新規技術分野におけるSFの影響は顕著であった。サイボーグやロボット(ロボティクス)などの装着型・自動機械技術、人工知能分野(シンギュラリティ)に見られる情報処理技術、遺伝子改良・クローンなどの医療技術、メタバースやサイバースペース等の通信技術など、SF由来、SFが影響した技術用語は数多く存在し、これらは長命化する社会や高齢者が技術補佐を受ける社会のビジョンを作成することに影響してきた。本研究ではこうした、超高齢化社会への技術導入がどのよ

うな対人関係・死生観の変化をもたらすか、という未来社会に対する文学・SFの想像力を、既存のSF作品から分析するとともに、SFプロトタイプングを通じて現在の生涯学の知見をもとに作家とともに未来ビジョンを作成する。

本目的のため2つの目標を置く。

A)サーベイ：フィクションにおける発達・加齢観の調査と現実への影響の評価

B)デザイン：SFプロトタイプングによる新しい発達・加齢観の探索

Aでは、人工知能技術に対する期待と不安を含む人々の想像力の歴史、フィクションが社会にもたらした役割について、過去の文献のサーベイおよびインタビュー、技術者、人文科学者、文学者を交えたディスカッションを通じて検討する。Bでは、今後人工知能を含めた科学技術が社会実装されることにより想定されるいくつかの未来像を、サーベイの結果をもとにして、既存のSF作品ではなく、SF作品を作る過程を通して超高齢化社会における発達・加齢観のビジョンを作成するSFプロトタイプングとして実施する。用語の歴史をたどるサーベイプロジェクト、サーベイの結果想定される新しい未来像を具現化して伝えるデザインフィクションプロジェクトの双方を通して、人々の想像力を踏まえた未来社会への設計論を作成し、社会と共有する。

タビューによるケーススタディを行う。この際、フォーカスグループインタビュー形式にて複数団体に調査を依頼する全体的ケーススタディの枠組みで調査設計を行う。次に、上記の調査結果を踏まえ、インタビュー調査の対象としなかった他の団体や、それらに関わった障害当事者へのアンケート調査を行う。調査項目は、前述の半構造化インタビューの項目を基盤とし、その書き起こし内容へのコーディング結果を踏まえて内容を補ったものとする。

2)1)および個人インタビュー結果に基づくレジリエンス性を維持・向上させた要因の分析

過去の研究で得た先天性・後天性の視覚・聴覚障害の方々へのインタビュー調査の結果と、1)のインタビュー調査の結果とを対応付けて、レジリエンス性について比較考察を行う。特に、コーディングされたタグのうち、レジリエンス要因に関するものを比較することで、個人の活動の中から得られるレジリエンス要因と、当事者団体・支援団体の媒介があって得られるレジリエンス要因とを整理する。

3)インクルーシブな生涯学習のためのインフォーマル/フォーマルな学習方策の提案

課題1)・課題2)の結果を踏まえ、視覚・聴覚障害の方々のインクルーシブな生涯学習の基盤になり得るインフォーマルな学習の場として、レジリエンス要因に関するワークショップの場の構築を試みる。この結果を踏まえ、インクルーシブな生涯学習のための学習方策について取りまとめる。



E01-L210

三浦貴大

産業技術総合研究所 情報・人間工学領域 主任研究員

### 視覚・聴覚障害者のレジリエンスを高める当事者団体を通じたインフォーマル学習の研究

高齢化が進む日本国内において、視覚・聴覚障害のある方の半数以上は高齢者である。彼らの感覚体験や生活訓練状況は多岐に渡るため、共通した生涯学習スキームや支援策を打ち出しにくい。これまで、障害状況ごとの対処経験やニーズなどを調査の上で、当事者団体・支援団体の寄与が重要である点を導いた。これら団体による支援方策・ノウハウなどは未解明である一方、この点の解明により障害のある人達における生涯学習や社会教育にも応用できる。そこで、本研究の目的を、先天性・後天性の視覚・聴覚障害のある方を支援する当事者団体・支援団体による支援要因を解明し、その支援スキームに基づく生涯学習方法論を確立することとする。このために、次の3課題について実施する。

1)視覚・聴覚障害者を支援する団体へのケーススタディ調査  
まず、視覚障害、聴覚障害のある方を支援する団体に対してイン

## D01 東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入 3年目

報告：石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者/東北大学)

### コロナ禍を経て得た新たな標準プログラム

社会教育主事講習のここ数年を振り返れば、講習期間中は日々のように、受講生のコロナ罹患や事故、異常気象に紐づく災害等、常々に不測のトラブルが現れ、その対応でいつも各県担当者と連絡を取り合っていた、という状況にありました。それが今年度は、そうした講習期間中のトラブルがとても少なく、その分、私どもも、久しぶりに受講生の学びに深くお付き合いできた年度となりました。

以下、アンケートに寄せられたご意見の一例をご紹介します。「大変学ぶことの多い講習でした。毎講義の度に新しく学ぶことがあり、次は何を学べるのだろうか、次はどんな世界が見えるのかと楽しみにしながら、講習を受けることができました。もっと早く講習を受けておきたかったと思えました。」「毎日、新しい学びの連続で本当に楽しかったです。大切なお話、貴重なお話でたくさんメモすることばかりで、ノートがあっという間になくなってしまいました。」「どの講義も新しい学びがあり、難しくも楽しく受講することができました。何かの事例やどのように考えるかについて、毎回同じグループで話し合うことが多かったので、他県の人と意見交換できる機会もあればとは思いました。」以上、ごく一部のご意見ですが、総じて、従来以上に、この講習の日々への深い満足が論じられた回答をきわめて多く得ています。

この背景には、コロナ禍の煽りを受けて中止されていた一週間規模の合宿が、東北自治総合研修センター(宮



城県富谷市)を活用して再開できたことが大きかったように思います。講習開始時に、講義や演習以外においても場と時間を共有した一週間によって、一人ひとりが深く知り合い、深い会話に至れる関係性がつくられ、調査に取り組むチームワークが深められましたし、授業以外の時間でたわいのない会話の中で、受講した内容の理解が深められていたように感じています。

私どもとしては、ここ数年の試行錯誤の中で行き着いた、①宮城・富谷での(個室)宿泊研修、②対面・各地区でのグループ視聴・個人視聴等、多様な受講方法をおり混ぜたスケジュール、③「生涯学」等、従来の講習よりも幅広い学習内容を含んだカリキュラム、からなる、この令和5年型の講習計画を、当面の基準にできるのではと考えています。

### 授業の様子 社会学への感想 (自らの生活世界を潜らせて語る)を例に

生涯学からの講義は、昨年、一昨年と同様、心理学、社会学、人類学の三つの講義を行なっていただきました。そのなかでもこの度は、従来と異なる講義形態が試行された、社会学の授業に絞って、様子と受講者の反応をご紹介します。今年度の社会学では、筒井・柴田両先生が対話をされ、そこにときどき、石井山も加わるという授業の展開が試みられました。その結果、受講生の感想が、従来とは大きく異なる出方になったことが印象的でした。

今にして思えば、従来の感想は、授業の内容をご自身なりに咀嚼し、要点をまとめ、そこに感想を加える、といった内容であり、ゆえに講義内容に情報が閉じた感想が揃っていたように思います。とくに社会学の場合、研究の進め方、データの導き出し方、その読み方への関心・感心といった意見が多勢でした。それがこの度は、そこで紹介されたデータや分析を自らの生活世界と照らし合わせたところからの感想、つまり、自らの生活世界と繋げた語りが多く現れました。これらの感想を通して、私自身、受講生の生活世界についての理解を一層深められた内容でした。ごく断片的ですが、その一部を感想欄で紹介

これ以外にも、より深く、自らの生活や、人生における選択での判断が論じられた語りがたくさん現れました。学習から社会実装への道筋を拓こうとした際、こうした、学習者が自らの生活世界を潜らせながら考えを深めてもらう機会が重要であるということを改めて感じた次第です。

ただし、受講生からはまた、「この講義で扱った内容は、どれも、最近特に丁寧な議論が求められるところである

と考えています。90分に収めるためには仕方ないとは思いますが、だからこそ勿体なかったなと思います。」といった感想もいただきました。この感想から私たちが今後検討すべきは、受講生が自らの生活世界を潜らせながら考え、発信するにとどまらず、そこから講師が受講生と、受講生の生活世界をより深く理解し、そこに向けての応答を試みる、というサイクルなのではないかと考えております。

### 受講生の感想(抜粋)

#### 社会学の授業を受講して

- 人口減少、女性の結婚、出産についてお聴きし、自分自身を振り返る時間となりました。私自身は大学卒業後、仙台で働いていましたが震災後地元で働きたいと強く思い、地元の小企業で働きはじめました。地元の中小企業はどれも給与が安く、男性も女性も一人暮らしをするのも難しい状況でした。同じ年代で結婚している方は、子どもができたため結婚するか、高校を卒業してすぐに結婚するかのどちらかで、離婚率も高く、周りからそれほど結婚や出産に希望が持てない内容の話をお聴き、ひとりで生きていくために複数の個人年金保険に加入しました。
- 授業で話題になった地方公務員の早期離職について、体感ですが、市役所職員は3~5年でジョブローテーションがあり、毎日が転職レベルの配置換えも一つの要因ではないかと思いました。私自身、新規採用時に全く希望していない生活保護のケースワーカーを命じられ、あまりの過酷さに毎日いつ辞めるかを考えていました。なんとか辞めずに現在がありますが、精神を病む人も多く、そのカバーをさせられる人も多いという現状があります。
- 地方の少子化について、農家支援に対する金銭的支援が足りないと感じています。地方では都会からの農業移住者を受け入れるPRをされていますが、その後の金銭的支援については全く足りていません。各県や市町村によっても支援は様々ですが、私の住んでいる市ではそのような現状です。なので、IターンやUターンして家業を継ぐなどしたいけれどもできないという声を聴きます。また、学校の統廃合に

ついても地域から子どもがいなくならないよう、市町村で通学バスを出すなどして対応する、廃校を有効活用する、地域住民のコミュニティの場にするなど工夫が必要だと感じました。

- 人口減少に対応するために、女性が子供を産みやすい環境、仕事をしやすい環境をつくるということについて私も考えてみました。結婚しても子どもがきらいで生まない人、欲しくても子どもに恵まれなかった人、早く結婚した場合でも同じ人たちがいると考えられます。結婚したくても、結婚したいと思える人に出会えない人もいます。私の場合は20代で好きな人と結婚をして、その人との間に子供が欲しいと思ったとき、自分の住んでいる環境に目をむけませんでした。子どもを産んでから、子育ての大変さを知り、地域の環境に目を向けるようになりました。地域の環境が魅力的であったから結婚・出産したわけではありませんでした。／子育ては、父親と母親が一緒にできれば一番いいのではないかと思います。それが、今までの日本で難しかったからこそ、そこができるようになればよいのかなと思います。例えば、もう少し小さい頃から、父親も一緒に子育て・家事をすることが当たり前という教育が行われるなど。(中略)／学校教員としては、不登校やひきこもりの人数が増えていることも心配です。／夫婦ともに、子どもを育てるには、働き方改革も必要であると感じました。普段の生活では、こんなにじっくり考えることがなかったので、とても貴重な時間になりました。ありがとうございました。

領域  
全体

## 「生涯学」領域会議・国際シンポジウム開催報告

2023年3月18・19・20日 **ハイブリッド** 京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館「生涯学」第5回(2022年度第2回)領域会議(18日)  
国際シンポジウム International Symposium on Lifelong  
Sciences(19・20日)2023年8月26・27日 **ハイブリッド** 金沢市文化ホール

## 「生涯学」第6回領域会議(2023年度第1回)領域会議

科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)(2020年度～2024年度)「生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新」[略称「生涯学」]において、2023年3月に領域会議および国際シンポジウム、同年8月に領域会議を開催しました。

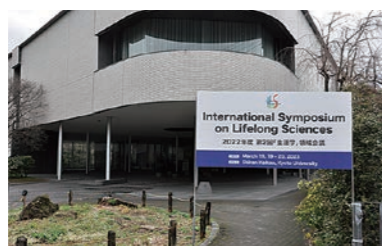
3月18日(土)は、第5回(2022年度第2回)領域会議と企画イベント「生涯学と防災」を実施し、19日(日)・20日(月)に国際シンポジウム International Symposium on Lifelong Sciences を京都大学芝蘭会館稲盛ホールにて開催しました。領域会議・シンポジウムの参加者は計125名(現地110名+オンライン15名)となり、また国

際シンポジウムでは領域外から8名(うち海外から7名)のゲストにご発表いただき、国際的かつ学際的な学術交流となりました。

8月26日(土)・27日(日)に開催された第6回領域会議(2023年度第1回)領域会議には、96名(現地90名+オンライン6名)が参加し、口頭発表・ポスター発表に加えて、融合研究に関する米田隆先生の講演、障害・高齢化に関する学際シンポジウム、アンチ・アンチエイジングに関する上野千鶴子先生の特別講演も行われ、活発な学際的議論が行われました。



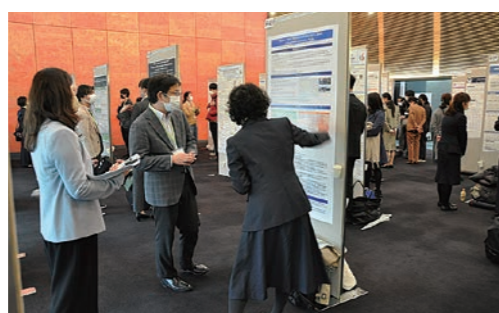
The pamphlet of International Symposium



第5回(2022年度第2回)領域会議および International Symposium on Lifelong Sciences会場(芝蘭会館)



第5回(2022年度第2回)領域会議 記念写真(於 芝蘭会館)



第5回(2022年度第2回)領域会議 ポスターセッション



Opening Remarks of International Symposium on Lifelong Sciences

## 「生涯学」第5回(2022年度第2回)領域会議 プログラム概要

3月18日(土)

14:00 開場

特別講演

14:30-15:30 防災は生涯を豊かにする  
—— 気象キャスター・防災士の経験から考えること  
塩見泰子(気象予報士)

15:30-15:45 休憩・ポスター会場(山内ホール)へ移動

15:45-17:00 ポスターセッション

## Program of International Symposium on Lifelong Sciences

◆...Guest Symposiast

[Day 1st] 19th March 2023

10:00-10:10 Opening Remarks

Takashi Tsukiura, Project leader/Kyoto University

Session I: Brain and Mind in Lifelong Sciences

Chairperson: Wataru Teramoto, Kumamoto University

10:10-10:30 Psychological resources for aging well:  
Evidence from an Interdisciplinary Study  
Yukiko Nishita, National Center for Geriatrics and Gerontology

10:30-11:00 Multisensory interactions supporting  
mobility in aging  
Jennifer Campos, Toronto Rehabilitation Institute ◆

11:00-11:20 To Remember life fondly: Finding reasons  
for nostalgia  
Kentaro Oba, Tohoku University

11:20-11:50 From *Description* to *Modulation*: Current  
evidence and emerging directions in  
multimodal neuroimaging of Alzheimer's  
disease  
Yuta Katsumi, Harvard Medical School ◆

11:50-12:10 Behavioral synchronization and EEG  
synchronization for human-human  
communication  
Masahiro Kawasaki, University of Tsukuba [Online]

12:10-12:30 General Discussion

12:30-14:00 Lunch Time

Session II: Societies and Social Implementation in Lifelong Sciences

Chairperson: Makoto Kurata, Tokyo Medical University

14:00-14:20 How does public support in early life  
affect outcomes in adulthood?: Long-term  
effects of nation-wide early childhood  
education and care at ages 0-2  
Haruka Shibata, Kyoto University

14:20-14:50 Aspects of a lifelong learning society and  
its policies  
Kiichi Oyasu, Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO ◆

14:50-15:20 Biological and cultural diversity of sleep  
and our view of sleep  
Koichiro Zamma, Nagano Collage of Nursing

15:20-15:40 Break

15:40-16:00 Becoming normal: Cochlear implantation,  
hearing brains, and ambivalent use  
Michele Friedner, University of Chicago ◆

16:00-16:30 Positive health, a new dynamic concept of  
health from the Netherlands  
Jeanette Akane Chabot ◆

16:30-16:50 General Discussion

16:50-17:10 Break

17:10-18:40 Poster Session

19:00-21:00 Reception

[Day 2nd] 20th March 2023

Session III: Interdisciplinary Approach on Lifelong Sciences

Chairperson: Mariko Kikutani, Kanazawa University

10:00-10:20 Investigating resilience elements based on  
insights from life histories of people with  
visual and hearing impairments  
Takahiro Miura, National Institute of AIST

10:20-10:50 The power of self-compassion  
Christopher Karl Germer, Harvard Medical School  
[Online] ◆

10:50-11:10 Self-monitoring using a smartphone app  
for managing premenstrual syndrome:  
Testing a novel tool for empowering  
reproductive-aged women to improve  
healthcare outcomes  
Miho Egawa, Kyoto University

11:10-11:40 How work can be a lifelong source of  
joy, pride, engagement, and health: An  
occupational health perspective  
Kaori Fujishiro, National Institute for Occupational  
Safety & Health [Online] ◆

11:40-12:00 Toward Understanding development  
of adaptive locomotion: a pilot study  
of quantification of obstacle crossing  
behavior in preschool children  
Masahiro Shinya, Hiroshima University

12:00-12:30 Moratorium among Japanese third agers  
Keiko Katagiri, Kobe University ◆

12:30-12:50 General Discussion

12:50-13:00 Closing Remarks

「生涯学」第6回(2023年度第1回)領域会議 プログラム概要

【1日目】 8月26日(土)

13:00-13:10	開会挨拶 月浦 崇(領域代表者/京都大学)
<b>口頭発表セッション1</b> 座長: 日高聡太(A01班 研究分担者/上智大学)	
13:10-13:25	知覚系の知識獲得機構の加齢変化 寺本 渉(A01班 研究代表者/熊本大学)
13:25-13:40	記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構 月浦 崇(A02班 研究代表者/京都大学)
13:40-13:55	日常的にできる生活介入による高齢者の認知機能の改善 野内 類(公募A04-L201班 研究代表者/東北大学 加齢医学研究所(当時. 現人間環境大学)) ※オンライン発表
13:55-14:10	更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明——サポートシステム構築に向けて 石井礼花(公募A04-L207班 研究代表者/国立精神・神経医療研究センター)
14:10-14:20 休憩	
<b>口頭発表セッション2</b> 座長: 倉田 誠(C02班 研究代表者/東京医科大学)	
14:20-14:35	ヒト—モノ関係による経験の変容とつながりの創出 倉田 誠

【2日目】 8月27日(日)

<b>口頭発表セッション3</b> 座長: 月浦 崇	
10:00-10:15	認知症高齢者のがんサバイバーシップを支える緩和ケア看護学の創出——無治療でも豊かな生涯を送れる社会のために 坂井さゆり(公募E01-L201班 研究代表者/新潟大学)
10:15-10:30	老化変容レジレンスの修復による老化新健康概念の創出 近藤祥司(公募E01-L205班 研究代表者/京都大学)
10:30-10:45	未病を在宅で検知する——デジタルバイオマーカーによる『身体天気予報』 坂野晴彦(公募E01-L207班 研究代表者/京都大学 医学部附属病院 先端医療研究開発機構)
10:45-11:00	野生チンパンジー社会における高齢個体の生き様——人口動態と行動観察による再定位 松本卓也(公募E01-L203班 研究代表者/信州大学) ※オンデマンド発表
11:10-11:20 休憩	
<b>口頭発表セッション4</b> 座長: 渡邊大輔(B01班 研究分担者/成蹊大学)	
11:20-11:35	「人生100年時代」の生涯観 安元佐織(公募B03-L101班 研究者代表/大阪大学) 筒井淳也(B01班 研究代表者/立命館大学)

14:35-14:50	密着した身体接触を続ける中間集団の生涯観——超高齢化するスペイン・カタルーニャから 岩瀬裕子(公募C03-L201班 研究代表者/東京都立大学)
14:50-15:05	成熟・再生する職人仕事の人類学的研究——染織業における人・モノ・環境の連環を事例に 丹羽朋子(公募C03-L202班 研究代表者/国際ファッション専門職大学)
15:05-15:20	民俗・民族考古学的視点から見た東アジア・東南アジアの人々の生涯 松永篤知(公募E01-L202班 研究代表者/金沢大学 資料館)
15:20	情報共有 小池進介(公募A04-L203班 研究代表者/東京大学)
15:20-15:40 休憩	
招待講演 座長: 松井三枝(A03班 研究代表者, 金沢大学)	
15:40-16:40	生活習慣の改善を促すデジタル医療 米田 隆(金沢大学)
16:40	全体集合写真撮影
16:40-18:30	ポスターセッション

抄録掲載のみ	社会実装にむけて——『きらりよしじまネットワーク』との協働 石井山竜平(D01班 研究代表者/東北大学)
11:35-11:50	サイエンス・フィクションが示唆する未来の発達・加齢観の分析 大澤博隆(公募E01-L209班 研究代表者/慶應義塾大学)
11:50-12:05	年齢を超えて誰もが自由自在に歩いてコミュニケーションできるメタバース 北崎充晃(公募E01-L204班 研究代表者/豊橋技術科学大学)
12:05-13:40 昼食	
領域内交流プログラム	
13:40-15:00	障害・高齢化プロセスと社会・環境 司会: 筒井淳也、日高聡太 話題提供者: 木村 亮(公募A04-L205班 研究代表者/京都大学)、渡邊大輔(総括班/成蹊大学)、倉田 誠
15:00-15:20	講評 領域内評価者、文部科学省学術調査官、他
15:20-15:30	閉会挨拶 月浦 崇
サテライト特別講演 司会: 松井三枝	
15:40-16:40	アンチ・アンチエイジングの思想 上野千鶴子(東京大学(名誉教授))



第6回(2023年度第1回)領域会議 招待講演(米田隆先生)



第6回(2023年度第1回)領域会議 記念写真



サテライト特別講演チラシ



第6回(2023年度第1回)領域会議 口頭発表セッション会場



第6回(2023年度第1回)領域会議 開会挨拶

第6回(2023年度第1回)領域会議参加者の感想

人間と蚕の生涯が織りなす「養蚕」という世界——第6回領域会議での気づき

現在私は東京工業大学にて文化人類学の領域で国内の養蚕業における養蚕農家と蚕の関係を調査しています。養蚕農家は春から秋にかけて約1か月のサイクルで蚕を育て、繭を生産します。繁忙期には日が昇る前から深夜まで働き続ける養蚕農家は、私が想像していた以上に密接に蚕とともに生きています。

これまで人間は良質な生糸を生産するため数千年をかけて蚕を品種改良し、完全家畜化してきました。近年では、蚕に対する遺伝子組換え技術や、無菌工場で年間を通じて大量の蚕を飼育する技術が確立しており、今後さらなる技術革新が見られるでしょう。他方、農業としての養蚕は、従事者の高齢化や後継者不足の影響により衰退の一途をたどっています。2,000年以上人間の手を介して展開されてきた伝統的な養蚕が低迷し、工業型の養蚕が台頭しつつある現代は、人間と蚕の関係自体を転換し得るのではないのでしょうか。

私は2023年8月に石川県金沢市で開催された第6

回領域会議にて、自身の調査に関するポスター発表を行いました。社会との関係から個々人の生涯を捉える「生涯学」の視点に刺激を受けると同時に、心理学や社会学、文化人類学、教育学に至るまで多角的に「生涯」を捉えるヒントで溢れており、私自身も多分野の研究者から多くのフィードバックをいただきました。

本領域会議を経て、私の研究テーマにおいて生涯学の対象は人間のみならず蚕という他種をも内包するようになるようになりました。人間の手を介さねば途絶えてしまう蚕の「生涯」、そして、蚕という存在によって成立する養蚕農家の「生涯」。こうした人間と蚕の絶対的な相補関係を文化人類学的手法で調査することによって、人間と蚕が織りなす養蚕という生業をより立体的に捉えられるのではないのでしょうか。引き続き私も分野横断的な「生涯学」という視点を交えながら、人間と蚕の関係を包括的に調査していきたいと思っています。

小澤茉莉

(東京工業大学 環境・社会理工学院 修士課程2年 [当時. 現同博士後期課程1年])





## 現代女性の健康と人生を支える 「女性のための生涯学」

江川美保 (公募E01-L206班 研究代表者) × 筒井淳也 (B01高年社会参加班 研究代表者)

江川美保さんは、「女性の生涯学」の提案と女性の社会参加への応用を目指す公募研究の班代表として、生涯学に参加されています。高年社会参加班の代表であり、家族社会学を専門とする筒井淳也さんに、江川さんの研究について聞いていただきました。

### 少子化問題を扱う 社会学にとっても重要な分野

筒井：生涯学に「女性」を対象とする研究が加わってくださったことの意義は非常に大きいと思っています。私の専門は家族社会学で、少子化問題について政治家の方やメディアから聞かれることが多いこともあり、江川さんのご研究に興味深く拝見してきました。

江川：ありがとうございます。女性は子どもを産み育てる性として、生涯にわたって女性ホルモンの影響を強く受けます。女性が心地よく生きていくにも社会参加するにも、その影響を理解し、対応するための指針となる「女性のための生涯学」が必要だと考えています。

筒井：江川さんは婦人科医として患者さんを診察されて30年とのことですが、なぜ婦人科を専門とされたのでしょうか。

江川：もともと精神医学や心身医学に関心がありましたが、母性を守りたいという気持ちと、更年期障害というテーマなら心と体の両方を診られるという考えから、女性に寄り添う婦人科に進みました。

ところが現職に着任してからは、思いのほか重症の月経前症候群(PMS)で苦しんでいる患者さんに出会うことが多かったのです。そこで特にPMSについて深く考えるようになりました。

PMSの症状は、頭痛やむくみ、抑うつなど非常に幅広く、程度も多様です。そのうえ、本人はとても辛いのに検査をしてもなんの異常も出てこない。とくに私がいま勤務しているような大学病院には、一般的な治療では軽快しなかったという患者さんが来られます。「次の手」を探るために、まず私は患者さんの困りごとを積極的に訊ねることから始めました。

すると、一部の患者さんは自分の症状のメモを基に、限られた時間で一生懸命語ってくれるようになったんです。日常生活の中でどのようなときに辛くなり、どのようなことを習慣にすると調子よくなるか。どの薬を使ったときには軽快し、どの薬では変化がなかったか。

対話を重視したそのような診療の中で、医師の私が提案する治療薬やセルフケアの選択肢のなかから自分の意思で選びとれる方も出てきました。

そうした患者さんは「自分を観察し、記録し、医師と話し合い、自分を少し変える」ことを繰り返すことによって、ご本人の自己効力感が高まり、症状改善にもつながっているように見えました。

それを確かめるべく、生涯学の公募研究では、以前に開発した症状記録のスマホアプリを用いて、「セルフモニタリングとセルフケアのアドバイスを受けることがどれぐらい



症状改善に寄与するか」を検証しています。

加えて、PMSの客観的な指標を得たいと考えています。PMSの特徴は医療機関での一般的な検査ではとらえられないので、脳活動に着目しました。fMRIを使って月経前と月経後の脳機能の違いを調べています。

### 平均的な「ヒト」と、 異質性をもつ個々の人間

筒井：社会学には、人の「異質性」に注目するという特徴があります。たとえば、調査の際に「二〇代男性」に共通の傾向を見ようとしても、人によって所得も生活スタイルも違いますよね。

きっとPMSの患者さんにも、放っておいても記録をつけるような人と、つけてくださいと言われて初めてつけ始める人がいるだろうと思います。そういう状況から「何のおかげで症状改善したのか」という因果関係を突き止めるのはなかなか大変だろうと推察しています。

江川：はい、その通りだと思いますが、今回は医学研究の本流に沿ってランダム化比較試験を行いました。人をできるだけ平均的で偏りのない存在として「この介入法はこの症状に効くか否か」を調べるスタイルです。

しかし、私がふだん見ている臨床の現場は異質性だらけです。ほかに疾患をもっている人もいますし、トラウマのある人、仕事・育児・介護でストレスを抱えている人、あるいは発達障害の子の療育に多くのエネルギーをとらえている母親がPMSに悩んでいることも多いです。

マルチタスクの生活では、自分のケアが二の次になってしまうのも無理はありません。とりわけ次世代を生き、社会の再生産を担う20-40代において、そのような時期は多かれ少なかれあるものではないでしょうか。

現代の女性が健やかに生き、  
子どもを産むためには  
上の世代や過去からの言い伝えのみではなく、  
現代の医学的知見も必要です。  
更年期の意味も問い直したいと考えています。



さまざまな場面で女性が働いてきたからこそ家族の生活が機能し、社会が成り立っているのですから、「家庭にいる女性は活躍していない」という考えはおかしいと私も思います。実際、社会学者は「女性活躍」という言葉をほとんど使いません。

社会学ではこの30~40年にわたって、従来、女性の役割とされてきた仕事、つまり「ケア」の仕事について、インテンシブに議論がなされてきました。

どのような議論が行われているかについてはまた別の機会にでもお話できればと思いますが、私が望むのは、「ケアの経験をもつ女性に、社会の意志決定の場においてほしい」ということです。

いま政策を決めている人たちは主に中高年男性たちで、ケアの経験をほとんど持たず、ケアに関して政策として何が必要か、想像がついていません。

たとえば、三世帯同居の家庭を標準的な、あるいは理想的なモデルと考え、画一的な支援策を作ってしまう。私は政府の審議会などに呼ばれると、一律の制度でなく柔軟性の高い制度を、と訴えるのですがなかなか聞いてもらえないのが現実なのです。

社会学者には、「社会と長くつきあうお医者さん」のような側面があり、メディアや政治家の方からしばしば、「先生、児童手当をいくら上げれば日本の出生力が上がりますか」という質問を投げかけられます。しかし、少子化について「これを飲めばきれいさっぱり完治する」というような特効薬はないんです。江川さんが診ていらっしゃるPMSと同じ

るものがあるように思いました。

**江川：**ちょっと極端な言い方になりますが、私はあるとき、PMSに関して“治す医者”をやめたんです。これだけですべてが解決する、という魔法の薬はない。

薬を使わないという意味ではありません。ピルも漢方薬も積極的に使います。しかしそれは症状を押さえ込むためではなく、体の調子を全体的に整えていくため。

ピルで体調の波がおだやかになっている間に、私は患者さんの「好循環のスイッチ」を入れようとしています。好循環とは、自分の体を理解し、調子を整えるためにできることを判断し、主体的に取り組むようになることです。運動でも、栄養改善でも、マインドセットの変革でもいい。

自分の在り方を良い悪いとジャッジすることが目的ではない。自分にとって必要なことやできることに一つずつ取り組むこと、そうした試行錯誤をコツコツとやっていくことが「生きる」ということなんじゃないかと思うんです。私はそれを側面から支援する立場だと思っています。“治す”ではなくて。

患者さんを育てる、というと僭越ですが、医師として医学的な根拠に基づいて選択肢を提示し、患者さん自身の変化を応援する、と言ったらいいでしょうか。

**筒井：**非常に示唆に富むお話です。政治家の方やメディアの方に「少子化問題に単一の解決策はない」と言ってもわかってもらいにくく、ずっと歯がゆい思いをしてきたのですが、それに対してヒントをもらったように思います。



私の班では  
「生涯観は時代とともにひとりでに変化している」ということを前提として研究を進めています。  
女性の生涯の月経回数が  
今と昔で異なるのも象徴的ですね。

ゆえに、臨床の現場で一律に理想の形を押しつけることには意味がありません。起き上がることもできない人に「運動が大事です」と言ったって、ふさぎこんでいる人に「規則正しく、栄養バランスのとれた食事を毎食作りましょう」と言ったって、解決にはなりませんから……。個々に、「今できるセルフケアは何だろうか」と患者さんとともに考えることから始めます。

## 「標準的なライフコース」 があるという思い込み

**筒井：**私が代表を務める高年社会参加班では、「生涯観は時代とともにひとりでに変化している」ということを前提として研究を進めています。たとえば団塊の世代の生涯観とその親の世代では平均寿命も一世代あたりの子どもの数も異なり、価値観もライフコースも違ったものになります。

しかし人は「標準的なライフコース」というものがあると思ひ込み、それは自分の子や孫の世代でも変わらないと考えてしまう。そこからいろんなきしみが生まれます。江川さんの領域でいうと、女性の生涯の月経回数が昔と今ではまったく異なる、という点が象徴的だと思います。

**江川：**その通りです。昔の女性が一生涯に経験した月経は50回ですが、少産化・晩産化の進んだ現代では450回。実に10倍近くに及びます。

子宮内膜が厚くなるとは剥がれ落ちる月経を数多く繰り返し、かつ妊娠を経験しないライフスタイルでは、子宮内膜

症を発症するリスクが高まることが知られています。子宮内膜症は不妊症の原因にもなります。いまの婦人科の知見では、月経痛や過多月経やPMSには低用量ピルを用いた月経コントロールが推奨されています。

過去の女性が蓄積してきた「おばあちゃんの知恵袋」には、そうした教えは入っていません。現代の女性が健やかに生き、子どもを産むためには、現代的な「月経とつきあう知恵」が必要なんですよ。

## ケアを担う女性を無視した 「女性活躍」という言葉

**江川：**社会学の筒井さんに伺ってみたかったのですが、近年よく「女性活躍」と言われますよね。その「女性活躍」とは、組織のリーダーになったり、数字に反映される成果を出したり、つまり家庭の外での活動を指しているように感じます。

しかし、そうした仕事ではなくとも、家の中で大きな働きをしている女性がたくさんいます。家族の中の弱いメンバーに寄り添い、家庭の大きなトラブルを回避し、生活の安寧を保つことに大きく貢献してきた人たちです。

女性は家庭内にとどまるべきだと言いたいわけではなく、性別にかかわらず、そういう役割を果たす人の存在が必要な時期は、たいていの家族にあります。その人たちに「もっと“外で”活躍を」と言うことに違和感を覚えるのですが。

**筒井：**おっしゃる通り、家族内の育児や介護、看病などの

# 受賞報告

「生涯学」プロジェクトの一環として推進された研究が、その成果を学界に認められ、各学術団体の定める賞を授与されました。ここにその概要を報告するとともに、受賞研究者の所感を紹介します。

受賞

## 日本医師会医学研究奨励賞

### 「脳磁気共鳴画像を用いた精神疾患判別の機械学習と臨床応用」

小池進介(公募A04-L203班 研究代表者)

授与者：(公社)日本医師会

授与：2022年11月1日

#### 所感

2021年度と2023年度の2期にわたり「生涯学」公募班にて研究活動に取り組んでおります。2022年度、日本医師会医学研究奨励賞をいただくことができました。ニュースレターにて、今回の受賞について報告の機会を頂きましたので、これまでの研究活動の自己紹介も兼ねて、寄稿いたします。

私は2004年に東京大学を卒業し、初期臨床研修(いわゆる初期研修医)に進みました。2004年は制度改革元年で、内科、外科、救急、小児科、産婦人科、精神科を2年で回るスーパーローテーションが突然(たぶん数か月で)決まりました。その功罪はさておき、私が精神疾患の研究を始めたのは2007年(28歳)からになります。それまでt検定というものの存在を知っていましたが、使ったことはありませんでした。

来年度で医師になって20年、精神科医として19年働いたこととなります。20年前の精神科は、いわゆる日陰産業でした。精神科医は何をやっているかわからない、精神疾患をもっている人は恐ろしい、が一般的な時代でした。

この常識を変えた一つの要因が脳画像研究であると言えます。当時、精神疾患は心の病気、本人や家族のせい、気の持ちよう、という意見がまだ多数あり、一部の精神科医も脳の病気ではないと信じていました。現代において、精神疾患は脳の機能障害であり、心の動きも脳活動の変動によって起こることは一般常識になっています。

脳画像研究は、精神医学や心理学の概念も変えていったと思います。精神疾患や心理現象をみるアプローチはより生物学的になり、その立証プロセスの中で脳画像研究は(自らが行わないにせよ)必須項目の一つになったと言えます。教育面でも、脳画像計測や解析は学部生から履修できるようになりました。

脳画像研究自体の進歩も著しいものがあります。脳画像計測・解析は高度になり、もはや数学です。臨床研究では1,000計測を用いた解析が当たり前、10,000計測データを適切に処理する技術が求められるようになってきています。新規参入者はt検定から勉強して、最先端の脳画像研究に追いつく絶え間

ない努力が求められるようになりました。なので、どういったところが引かかるのか教えてください、セミナーでやります(私の研究課題④)。

今回受賞に至った成果は、精神疾患脳画像の機械学習による判別です。いまは、機械学習で精神疾患の鑑別診断が可能か、脳画像による再分類によって予後が予測できないか、精神疾患の機械学習器を思春期発達にあてはめたらどうなるか、などを行っています。今後、脳画像研究の進歩、一般への普及はさらに進むでしょう。20年前、遺伝子解析は単一の遺伝子変異をみるのが主流でした。いま世間では、だ液から100万遺伝子多型をタイピングし、様々な疾病の遺伝的リスクを知るサービスがあります。研究分野においても、数年前には1検体50万円かかった全ゲノム解析がとうとう10万円を切りました。

この先20年でも、研究、教育、臨床、いずれの場面においても大きな変化が予想されます。一般常識や、研究者や精神科医の見方も大きく変わるでしょう。スマートフォンのように広く受け入れられるか、抵抗勢力として煙たがられるか、絶え間ない知識と思考のアップデートが求められていると感じます。

小池進介

(東京大学心の多様性と適応の連携研究機構・大学院総合文化研究科 進化認知科学研究センター 准教授)



## 更年期は、生涯における「衰退の始まり」ではない

筒井：江川さんは生涯学後期の公募研究にも採択されていますね。後期は更年期障害を対象とした研究とのことですが。

江川：はい、前期公募研究でテーマとしたPMSと密接につながっています。更年期障害で来院される患者さんは「40代後半の今でこんなに心身が弱ってしまうなら、50代以降はもっと辛くなる一方に違いない」とおっしゃいます。

しかし私はあるとき、更年期に差し掛かる前からPMSで来院されていた患者さんで、好循環の歯車を回し始めた方の多くは、更年期を元気に過ごされる傾向があることに気づきました。

たしかに、ホットフラッシュなど、女性ホルモンの減少によって出てくる症状はあります(それらにはホルモン補充療法が良く効きます)。ただ、疲労感やメンタル不調といったそのほかの症状は、PMSで苦しんでいた間にご自身で取り組まれたセルフケア、たとえば鉄やたんぱく質などの欠乏しがちな栄養を積極的に摂る生活改善などによって、防がれているように思われるのです。

つまり、女性は月経があるうちから適切なセルフケアをしておくことが健やかな更年期に繋がるのではではないか。

そう考えて後期の研究を着想しました。

また、更年期症状もPMSと同様に、セルフモニタリングによって症状改善があるかもしれません。そうしたことも研究のうちに入っています。

婦人科医としてあらゆるライフステージの女性を診察してきた経験から、私は、更年期は必ずしも「衰退の始まり」ではないと考えるようになりました。更年期は、月経がある間(社会の再生産を担う時期)に課せられた役割から解放され、自分らしさを再び見いだしていく(人生を統合する)期間だと思えます。

そんな風に患者さんとお話すると、患者さんは「じゃあ、卒業を楽しみにがんばりますわ」とおっしゃる。そして数年が経ってよいよ閉経となり、「これで卒業ですよ、おめでとう」とお知らせしたときの晴れ晴れとした顔。そして、だんだんと自分を大事にするライフスタイルを選んでいくようになる患者さんの成長を見るのが、婦人科医としての醍醐味です。

ただ、こうしたこと伝えられるのは私が外来で接する女性たちだけで、数が限られてしまいます。ですから生涯学場で研究を進め、その成果を広めたいと思っています。

筒井：期待しています。お話にたいへん刺激を受けました。ありがとうございました。



江川美保(えがわ みほ)

京都大学大学院 医学研究科 婦人科学産科学 助教

広島県出身。2014年より現職。京都大学医学部附属病院で月経前症候群や更年期障害などの診察にあたりつつ、疾患の治療だけでなく女性の健康の底上げをテーマとして、精神医学・脳科学・公衆衛生学・保健学・情報学など各領域の専門家や企業と連携して研究を行っている。

生涯学前期公募研究：性周期を軸にした「女性の生涯学」の提案と社会参加への応用  
生涯学後期公募研究：更年期の鉄欠乏とメンタル不調の関連——女性ホルモンの衰退に抗わない予防医学の開拓



筒井淳也(つつい じゅんや)

立命館大学 産業社会学部 教授

福岡県出身。2014年から現職。計量社会学・家族社会学を専門とし、社会調査によるデータをもとに日本の未婚化や成人親子関係など家族のあり方や変化を描き出すかわら、行政への提言や一般向け書籍の執筆にも力を注いでいる。著書に『仕事と家族』(中公新書)、『結婚と家族のこれから』(光文社新書)、『社会を知るためには』(ちくまプリマー新書)、『社会学——非サイエンス的な知の居場所』(岩波書店)、『未婚と少子化』(PHP新書)ほか多数。

2023年1月13日

**B02** **アウトリーチ**  
**研究成果の一部を新聞記事として発信しました**  
 「早期保育が高める幸福感」  
 日本経済新聞朝刊  
 柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2023年1月14日

**総括 B02** **アウトリーチ**  
**インタビュー記事が新聞に掲載されました**  
 「老いを『衰退』から『成熟』に」  
 神戸新聞夕刊  
 月浦崇(領域代表)・柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)  
 共同通信社から受けたインタビューを含む記事が掲載されました。また同記事の冒頭では、権藤恭之(公募A04-L104班 研究代表者)の講演内容も紹介されました。なお本記事は、全国の複数の地方新聞にも掲載されました。

2023年2月20日

**B02** **アウトリーチ**  
**研究成果の一部を新聞記事として発信しました**  
 「人生は波乱、苦難、そして成熟」  
 京都新聞  
 柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2023年3月

**領域全体** **アウトリーチ**  
**ニューズレター 2023 Marchを発行しました**

2023年3月4日

**公募 E01-L105** **学術集会**  
**第19回 姿勢と歩行研究会を開催しました**  
 基調講演「ヒトの直立二足歩行の力学・制御・進化」  
 萩原直道(東京大学)  
 ミニシンポジウム「若手学際シンポジウム——姿勢・歩行の神経制御に迫る」  
 横山光(東京農工大学)、高橋容子(順天堂大学)、中村晃大(大阪大学)  
 共催：アニメ株式会社、文部科学省科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)「生涯学」  
 ステーションコンファレンス万世橋

2023年3月11日

**C02** **学術集会**  
**第5回研究会を開催しました**  
 14:00 発表I「義肢を使うこと・使わないこと——先天性四肢欠損症を中心に」  
 桑原牧子(金城学院大学)  
 14:40 質疑応答  
 15:00 発表II「現代日本における靴と足—ビズポークと量産品の時代」  
 風間計博(京都大学)  
 15:40 質疑応答  
 16:00 全体討論  
 16:40 研究班連絡・研究状況報告  
 17:00 閉会  
 金城学院大学 M2棟 203教室  
**ハイブリッド**



2023年3月13日 15:00—17:00

**C02** **学術集会**  
**Michele Friedne博士の講演会を開催しました**  
**Political, economic, and relational production of sense: Negotiating sensory inequality and access in research on cochlear implantation in India**  
 講演：Michele Friedne(Chicago University)  
 東京医科大学 西新宿キャンパス 自主自学館3階 会議室A・B  
 (使用言語：英語)



2023年3月18日・19日・20日

**領域全体** **学術集会**  
**第5回領域会議(2022年度第2回)と国際シンポジウムを開催しました** →詳細はp.28-31

2023年4月1日

**B01** **アウトリーチ**  
**研究成果の一部を雑誌記事として発信しました**  
 「超高齢社会を乗り切るべく『生涯観』の刷新を」  
 中央公論 2023年4月号 pp.62-69  
 筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者)

2023年4月24日

**B01** **アウトリーチ**  
**日本記者クラブ記者会見で研究成果の一部を発信しました**  
 「人口減少 80万人割れの衝撃」  
 筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者)

2023年5月8日

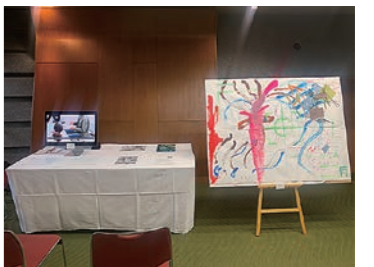
**公募 A04-L207** **アウトリーチ**  
**インタビュー記事が新聞に掲載されました**  
 「悩む親に子への接し方をトレーニング」  
 朝日新聞朝刊  
 石井礼花(公募A04-L207班 研究代表者)

2023年5月16日

**C01** **学術集会**  
**「第6回技能習得と発達についての人類学的研究研究会」を開催しました**  
 10:00 「タケ製気鳴楽器オイサとその演奏集団——エチオピア西南部アリ地域を事例として」  
 田中綾華(京都大学)  
 11:00 「2023年度 技能発達班研究計画について」  
 金子守恵(C01技能発達班 研究代表者)  
 京都大学 共同棟5階504室  
**ハイブリッド**

2023年5月26日

**公募 A04-L207** **アウトリーチ**  
**美術展を開催しました**  
**「SAISAI~差異才彩」**  
 主催：ASCAPAP、Nampujisai(南風時差異)  
 協力：Diversity on the Arts Project(DOOR)、東京芸術大学  
 (使用言語：英語)



2023年5月31日

**公募 E01-L209** **アウトリーチ**  
**SFプロトタイピングについての動向を新聞にコメントしました**  
 「想像力の現在地 世界を創るSF 第5回」  
 中日新聞夕刊  
 大澤博隆(公募E01-L209班 研究代表者)

2023年6月9日

公募  
E01-L209

学術集会

第37回人工知能学会全国大会において、  
企画セッション「人工知能と虚構の科学」を開催しました

司会(OS担当)：大澤博隆(公募E01-L209班 研究代表者)  
 オーガナイザー：大澤博隆、清河幸子(東京大学)、西中美和(香川大学)、宮本道人(北海道大学)、難波優輝(株式会社セオ商事/事前質問)

14:00 趣旨説明 大澤博隆、ファシリテーション：宮田龍(株式会社アラヤ)

14:10 「人間の発想支援に関する知見」  
 清河幸子、西中美和

14:35 「現状のAI技術が作家はどう捉えるか」  
 安野貴博(日本SF作家クラブ)、斧田小夜(日本SF作家クラブ)

15:05 「AIとSFプロトタイプング」  
 宮本道人、宮田龍

15:25 総合討論・質疑  
 主催：公益財団法人トヨタ財団、JSTムーンショット研究開発事業、日本SF作家クラブ  
 熊本城ホール  
 ハイブリッド

2023年6月30日

A01  
A02

学術集会

日本認知心理学会第21回大会 ベーシック&フロンティアセミナー  
 「多様な発達段階を対象とした知覚・認知研究を考える」において講演を行いました

17:00 企画趣旨説明 日高聡太(総括班 研究分担者)

17:05 「若年者群を対象とした行動研究実践」  
 白井述(立教大学)

17:25 「若年者群を対象とした脳機能計測研究実践」  
 小林恵(新潟大学)

17:45 「高齢者群を対象とした行動研究実践」  
 寺本渉(A01知覚・認知心理班 研究代表者)

18:05 「高齢者群を対象とした脳機能計測研究実践」  
 月浦崇(領域代表・A02生理心理班 研究代表者)

18:25 全体質疑  
 オンライン

2023年7月8日

C01

学術集会

第8回「生涯学」セミナーを開催しました  
 「国際保健とアフリカ地域研究」

13:00 Opening remarks

13:10 Holistic palliative care as a global health concern: The case of Ethiopia  
 Mirgissa Kaba(AAU/KU)

13:50 Questions & Comments

13:55 Medical local knowledge and safety from the perspective of  
 nurse-midwives in Tanzania  
 Dorkasi Mwakawanga(Hiroshima University)

14:25 Questions & Comments

14:30 Roles of water, sanitation and hygiene (WASH) and a health risk visualization approach. Hidenori  
 Harada(Kyoto University)

14:50 Questions & Comments

14:55 Closing remarks

共催：日本助産学会若手研究者活躍推進委員会(CEECS)、京都大学アフリカ地域研究資料センター、東京外語大学現代アフリカ地域研究センター、大学の世界展開力プログラム  
 TKP新橋カンファレンスセンター15階 カンファレンスルーム15B キャンピーホール  
 (使用言語：英語(講演通訳あり)) ハイブリッド



2023年7月8日

A03

受賞

2023 International Neuropsychological Society  
 Taiwan Meeting において Student Liaison Committee  
 Student Research Award を受賞しました

蝦名昂大(A03臨床心理班 研究員)



2023年7月15日

C01  
C02  
公募  
C03-L201

学術集会

「第7回 技能習得と発達についての人類学的研究研究会」を  
 開催しました

13:30 主旨説明ほか

13:40 研究発表「帰属意識と流動的な身体感覚に生きる——密接相の身体接触を続ける  
 「人間の塔」の継承集団(スペイン・カタルーニャ)を事例に」  
 岩瀬裕子(公募C03-L201班 研究代表者)

15:00 コメント 萩原卓也(東洋大学)

15:10 質疑  
 京都大学 共同棟5階 504室  
 ハイブリッド



2023年7月25日—10月22日

公募  
C03-L202

アウトリーチ

展覧会を開催しました  
 「映像のフィールドワーク展 vol.2——ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ」

せたがや文化財団 生活工房ギャラリー

2023年8月20日 10:00—12:00

A03

学術集会

公認心理師の会医療部会企画シンポジウムで指定討論者として招へいされました

脳の働きに障害を持つ人と出会ったら——高次脳機能障害、認知症、統合失調症、発達障害のアセスメントと支援」  
 松井三枝(A03臨床心理班 研究代表者)  
 司会：河野直子(大阪公立大学)、澤田梢(広島県立障害者リハビリテーションセンター)  
 話題提供者：緑川晶(中央大学)、角田千景(国立循環器病研究センター)、大塚貞男(京都大学)、井上雅彦(鳥取大学)  
 主催：一般社団法人公認心理師の会  
 東京大学 駒場キャンパス

2023年8月25日

A01  
A02  
A03

学術集会

**2023年度日本認知心理学会神経心理学部会対面研究会を  
開催しました**  
「社会認知研究の諸側面」

- 13:00 あいさつ 部会長 松井三枝 (A03臨床心理班 研究代表者)
- 13:10 「脳腫瘍患者における社会的認知研究から明らかになったこと」  
中嶋理帆 (金沢大学)
- 14:00 「ネガティブ情動の制御とその障害に関する神経基盤」  
吉村晋平 (金沢大学)
- 15:00 「自閉スペクトラム症と統合失調症の社会認知障害——その共通性と相違」  
大塚貞男 (京都大学)
- 15:50 「脳損傷患者における情動・動機づけ・社会的認知の障害とその影響」  
朴白順 (A02生理心理班 研究分担者・総括班)
- 16:40 討論  
主催：日本認知心理学会神経心理学部会  
石川県文教会館



2023年8月26日・27日

領域  
全体

学術集会

**第6回領域会議(2023年度第1回)を開催しました** →詳細はp.28-31

金沢市文化ホール  
ハイブリッド

2023年9月20日

公募  
CO3-L202

学術集会

**第1回公開研究会を開催しました**  
「ものづくりと産地をめぐる研究・座談会」

「繊維産業における事業承継と産地存続」  
篠原航平 (国際ファッション専門職大学)  
「繊維産地の直面している課題と、新しい動き」  
宮浦晋哉 (国際ファッション専門職大学、株式会社系編)  
共催：国際ファッション専門職大学共同研究「岩手県のホームパン産業に関する研究」  
オンライン

2023年10月13日

総括

学術集会

**第38回日本老年精神医学会において特別講演を行いました**

「『生涯学』の創出に向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究」  
月浦崇 (領域代表)  
日本教育会館

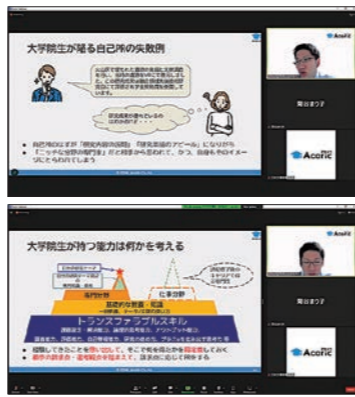
2023年10月23日 17:00—18:00

総括

アウトリーチ

**大学院生向けキャリアガイダンスを開催しました**

「データから見る大学院生の就職状況、就職活動時期」  
「トランスファラブルスキルの理解」  
「就活スケジュールと自己アピール」  
オンライン



2023年10月27日

B02

アウトリーチ

**研究成果の一部を新聞記事として発信しました**

「少子化対策、何ができるか(中)『働き方の柔軟化』最優先で」  
日本経済新聞朝刊  
柴田悠 (B02ウェルビーイング班 研究代表者)

2023年10月29日

A02  
A03  
公募  
E01-L106  
公募  
E01-L109

学術集会

**第47回日本高次脳機能障害学会学術総会にてシンポジウムを開催しました**  
「発達と加齢の高次脳機能——認知予備力が活きる生涯の理解と実践」

「認知予備力からみる超高齢社会における新しい生涯観」  
月浦崇 (A02生理心理班 研究代表者・領域代表)  
「認知予備力の概念とその臨床的理解」  
松井三枝 (A03臨床心理班 研究代表者)  
「超高齢者の aging in place における認知機能の役割」  
江口洋子 (公募E01-L106班 研究代表者)  
「高齢者の認知機能維持・向上に向けた最新アプローチ——認知予備力、ICTの視点から」  
三浦佳代子 (公募E01-L109班 研究代表者)  
仙台国際センター

2023年10月30日

A03

アウトリーチ

**Bayley-III乳幼児発達検査(日本語版)が刊行されました**

日本語版Bayley-III刊行委員会：中澤潤、田中恭子、岩田欧介、松井三枝 (A03臨床心理班 研究代表者)、片桐正敏、柿本多千代

2023年11月1日 13:30—15:00

公募  
A04-L202

アウトリーチ

**90回みんラボカフェ(筑波大学)を開催しました**  
「未病を在宅で検知する

——『身体の天気予報』をデジタル機器で」  
坂野晴彦 (公募E01-L202班 研究代表者)  
筑波大学人間系学系棟A201室  
ハイブリッド



2023年11月18日 15:00—16:30

総括

学術集会

**一般公開シンポジウムを開催しました**

「『生涯学』の発展——脱毛から身体と社会の関係性を考える」 →詳細はp.25  
共催：京都大学大学院 人間・環境学研究科  
京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホール  
ハイブリッド

業績一覧

情報提供期間：2022年12月21日～2023年12月15日

論文

伏木香織. 2021. 石井みどりの《ビルマ・プエ》——南方慰問と南方系演目の成立. 大正大學研究紀要106: 186-206.

江川美保. 2021. 精神症状の強い月経前症候群に対応する秘訣. 産婦人科の進歩 73(3): 399-400.

渡邊大輔. 2022. 新型コロナウイルス感染症と高齢者の世帯間家族交流. 老年社会科学 44(1): 30-36.

Kawase, T., Teraoka, R., Obuchi, C., Sakamoto, S. 2022. Temporal and directional cue effects on the cocktail party problem for patients with listening difficulties without clinical hearing loss. *Ear and Hearing* 43(6): 1740-1751.

杉田映理, 新本万里子. 2022. ローカルな文脈から見える開発実践への示唆. 月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援: 268-289.

新本万里子. 2022. パプアニューギニア焼畑農耕民アベラムの月経対処と開発支援のかたち. 月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援: 66-92.

新本万里子. 2022. 国際開発の対象となった月経の文化人類学的課題. 月経の人類学——女子生徒の「生理」と開発支援: 50-60.

Ohsuga, T., Egawa, M., Kii, M., Ikeda, Y., Ueda, A., Chigusa, Y., Mogami, H., Mandai, M. 2022. Association between non-anemic iron deficiency in early pregnancy and perinatal mental health: A retrospective pilot study. *The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research* 48(11): 2730-2737.

Uchida, Y., Nakayama, M., Bowen, K. S. 2022. Interdependence of emotion: Conceptualization, evidence, and social implications from cultural psychology. *Current Directions in Psychological Science* 31(5): 451-456.

澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 大上真一. 2022. 日本の都市高齢者の援助行動と被援助志向性——よこはまシニアボランティアポイント制度登録者における検討. 厚生指標 69(11): 1-7.

三谷はるよ. 2022. 子ども期の逆境体験(ACE)と自殺念慮. 自殺予防と危機介入 42(2): 9-13.

Uchida, A., Nakayama, M., Uchida, Y. 2022. Cultural psychological processes underlying workplace remuneration in Japanese and European American contexts. *Asian Journal of Social Psychology* 26(3): 318-332.

Mwakawanga D. L., Mwilike, B., Kaneko, M., Shimpuku, Y. 2022. Local knowledge and derived practices of safety during pregnancy, childbirth and postpartum: a qualitative study among nurse-midwives in urban eastern Tanzania. *BMJ Open* 12: e068216.

Getaneh Mehari, Kaneko, M. 2022. Livelihoods, dreams, and realities: Experiences of Ethiopian domestic workers returned from host countries. *African Study Monographs* 42: 77-96.

Mamo Hebo, Kaneko, M. 2022. Women's agency and the men in the shadow: complexities of women's land inheritance rights amid structural conflicts in Oromia region, Ethiopia. *African Study Monographs* 42: 61-75.

Otsuka, R., Yamakoshi, G., Kalema-Zikusoka, G. 2023. Tourist expectations and satisfaction in mountain gorilla tourism in Bwindi Impenetrable National Park, Uganda. *Journal of Ecotourism* 329-338.

石岡良子, 権藤恭之. 2023. 生物学的加齢と適応——認知予備力とポジティブ効果. 老年精神医学雑誌 34(2): 163-172.

Teraoka, R., Kuroda, N., Teramoto, W. 2023. Interoceptive sensibility is associated with the temporal update of body position perception. *Psychologia* 65(1): 4-16.

江口洋子. 2023. 視点: 高齢者の消費者被害状況とケアマネジャーによる支援. 月刊ケアマネジメント 34(3): 35-39.

Teraoka, R., Hayashida, Y., Teramoto, W. 2023. Difference in auditory time-to-contact estimation between the rear and other directions. *Acoustical Science and Technology* 44(2): 77-83.

Uchida, S., Moriya, J., Morihara, D., Kagitani, F. 2023. Nicotinic cholinergic regulation of olfactory bulb blood flow response in aged rats. *The Journal of Physiological Sciences* 73(1).

Ishida, T., Nakamura, Y., Tanaka, S.C., Mitsuyama, Y., Yokoyama, S., Shinzato, H., Itai, E., Okada, G., Kobayashi, Y., Kawashima, T., Miyata, J., Yoshihara, Y., Takahashi, H., Morita, S., Kawakami, S., Abe, O., Okada, N., Kunimatsu, A., Yamashita, A., Yamashita, O., Imamizu, H., Morimoto, J., Okamoto, Y., Murai, T., Kasai, K., Kawato, M., Koike, S. 2023. Aberrant large-scale network interactions across psychiatric disorders revealed by large-sample multi-site resting-state functional magnetic resonance imaging datasets. *Schizophrenia Bulletin* 49(4): 933-943.

Nakamura, Y., Ishida, T., Tanaka, S.C., Mitsuyama, Y., Yokoyama, S., Shinzato, H., Itai, E., Okada, G., Kobayashi, Y., Kawashima, T., Miyata, J., Yoshihara, Y., Takahashi, H., Aoki, R., Nakamura, M., Ota, H., Itahashi, T., Morita, S., Kawakami, S., Abe, O., Okada, N., Kunimatsu, A., Yamashita, A., Yamashita, O., Imamizu, H., Morimoto, J., Okamoto, Y., Murai, T., Hashimoto, R.I., Kasai, K., Kawato, M., Koike, S. 2023. Distinctive alterations in the mesocorticolimbic circuits in various psychiatric disorders. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 77(6): 345-354.

Miura, T., Watanabe, H., Matsuo, M., Sakajiri, M., Onishi, J. 2023. Investigating accessibility issues in scheduling coordination for visually impaired computer users. *Journal on Technology and Person with Disabilities* 11: 179-191.

石井山竜平. 2023. 現場で生かす社会教育とはいかなる営みか. 月刊社会教育 67(4): 5-12.

Noma, T., Godai, K., Kabayama, M., Gondo, Y., Yasumoto, S., Masui, Y., Sugimoto, K., Akasaka, H., Takami, Y., Takeya, Y., Yamamoto, K., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Rakugi, H., Kamide, K. 2023. Lower cognitive function as a risk factor for anemia among older Japanese women from the longitudinal observation in the SONIC study. *Geriatrics & Gerontology International* 23(5): 334-340.

Sala, G., Nishita, Y., Tange, C., Tomida, M., Gondo, Y., Shimokata, H., Otsuka, R. 2023. No appreciable effect of education on aging-associated declines in cognition: A 20-year follow-up study. *Psychological Science* 34(5): 527-536.

小池進介. 2023. 脳画像による機械学習解析を臨床現場に応用するために必要なこと. 日本生物学的精神医学会誌 34(1): 19-23.

Ishiguro, C., Ishihara, T., Morita, N. 2023. Extracurricular music

2023年11月19日・20日・21日

アウトリーチ

D01

東アジア生涯学習研究フォーラムin名護 2023を開催しました  
「集落・社区・マウルの自治と生涯学習政策」

主催：学術変革領域研究(A)計画研究「生涯学習計画に関する国家政策および地域主導計画の東アジアの視座からの検証」、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会(TOAFaec)、沖縄県名護市(屋部公民館(19日)、名護博物館(20日)等)(使用言語：日本語、韓国語、中国語)



名護市城公民館にて城青年会のイブニング



丸木位里・俊の「沖繩戦の図」(佐喜真美術館)の前にて、海勢頭豊氏のユニットによる平和の歌

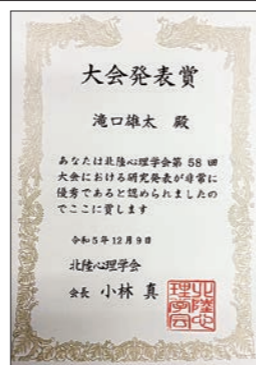
2023年12月9日

受賞

A03

北陸心理学会第58回大会で大会発表賞を受賞しました

滝口雄太(A03臨床心理班 研究員)



2023年12月23日 14:00-17:00

学術集会

総括

一般公開シンポジウムを開催しました  
「超高齢化社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」

- 14:10 「『生涯学』の創出へ向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究」 月浦崇(領域代表)
- 14:35 「高齢期における多感覚統合の変化と知覚の可塑性」 寺本渉(A01知覚・認知心理班 研究代表者)
- 15:00 「高齢期における孤独・孤立の実態と要因——社会学の観点から」 筒井淳也(B01高齢社会参加研究代表者)
- 15:40 「『やらない』ことが/を生み出す社会関係——サモアの事例から」 倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者)
- 16:05 「社会実装にむけての土壌形成を考える」 石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者)

主催：東北大学「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」研究班 東北大学文科系総合研究棟(C14)11階大会議室  
ハイブリッド



2023年12月25日

総括

A01

A02

A03

「生涯学」に関する特集が英文誌「Psychologia」に掲載されました

- and visual arts activities are related to academic performance improvement in school-aged children. *Npj Science of Learning* 8(1): 7.
- 江川美保. 2023. 働く女性と月経前症候群. 産業精神保健 31(1): 3-6.
- 王尚, 松田英子. 2023. 短期マインドフルネスストレス低減法による在日中国人留学生の睡眠改善に関する予備的研究. 行動科学 61(2): 73-83.
- 笠井賢紀. 2023. 栗東地域の小字データベース作成過程——分割地名と集落小字名に着目した分析を添えて. 栗東歴史民俗博物館紀要 29: 1-9.
- 西田裕紀子. 2023. 中高年期の知能の加齢変化とその関連要因——加齢に伴い成熟する能力とは. 生きがい研究 29: 58-66.
- 小林(新保)敦子, 長島啓記, 谷口利律, 山口香苗, 万静嫻, 劉琦, 周珏, 朱奕雷, 李俐穎. 2023. 学校教育におけるICTの活用に関する一考察——日本および中国における事例調査から. 早稲田教育評論 37(1): 175-194.
- Hidaka, S., Gotoh, M., Yamamoto, S., Wada, M. 2023. Exploring relationships between autistic traits and body temperature, circadian rhythms, and age. *Scientific Reports* 13: 5888.
- 小池進介, 岡田直大, 安藤俊太郎, 笠井清登. 2023. 思春期コホートの階層性データベース構築. 生体の科学 74(2): 152-157.
- 小池進介. 2023. 統合失調症のMRI研究——病態解明と臨床応用のために必要なこと. 精神医学 65(4): 443-453.
- Miura, T., Okochi, N., Suzuki, J., Ifukube, T. 2023. Binaural listening with head rotation helps persons with blindness perceive narrow obstacles. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 20(8): 5573.
- Teramoto, W., Ernst, M. O. 2023. Effects of invisible lip movements on phonetic perception. *Scientific Reports* 13: 6478.
- 西川一弘. 2023. 松下会館の歴史とこれから. 柑芦わかやま 46: 10-11.
- Takiguchi, Y., Kikutani, M., Matsui M. 2023. Evaluating positive effects of leisure from a life-course perspective: a literature review. *Psychologia* 65(1): 35-57.
- Nakamura, Y., Kabayama, M., Godai, K., Tseng, W., Akasaka, H., Yamamoto, K., Takami, Y., Takeya, Y., Gondo, Y., Yasumoto, S., Ogawa, M., Kasuga, A., Masui, Y., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Rakugi, H., Kamide, K. 2023. Longitudinal association of hypertension and dyslipidemia with cognitive function in community-dwelling older adults: the SONIC study. *Hypertension Research* 46: 1829-1839.
- Hori, N., Ishizaki, T., Masui, Y., Yoshida, Y., Inagaki, H., Ito, K., Ishioka, Y.L., Nakagawa, T., Ogawa, M., Kabayama, M., Kamide, K., Ikebe, K., Arai, Y., Gondo, Y. 2023. Criterion validity of the health assessment questionnaire for the national screening program for older adults in Japan: The SONIC study. *Geriatrics & Gerontology International* 23: 437-443.
- 小池進介. 2023. 精神病臨床的ハイリスク群の脳画像研究による病態解明と臨床応用. 臨床精神医学 52(4): 375-384.
- Muto, H., Gondo, Y., Inagaki, H., Masui, Y., Nakagawa, T., Ogawa, M., Onoguchi, W., Ishioka, Y., Numata, K., Yasumoto, S. 2023. Human-body analogy improves mental rotation performance in people aged 86 to 97 years. *Collabra: Psychology* 9(1): 74785.
- 渡邊大輔. 2023. 地域コミュニティは社会的処方: 要: 医師・薬だけに頼らないための社会的資源活用. 地域ケアリング 25(5): 27-33.
- Ishii-Takahashi, A., Kawakubo, Y., Hamada, J., Nakajima, N., Kawahara, T., Hirose, A., Yamaguchi, R., Kuwabara, H., Okada, T., Kano, Y. 2023. Changes in child behavioral problems and maternal attachment towards children with attention-deficit/hyperactivity disorder following behavioral parent training: A pilot study. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 77(7): 412-413.
- Noma, T., Kayo, G., Kabayama, M., Gondo, Y., Yasumoto, S., Masui, Y., Sugimoto, K., Akasaka, H., Takami, Y., Takeya, Y., Yamamoto, K., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Rakugi, H., Kamide, K. 2023. Lower cognitive function as a risk factor for anemia among older Japanese women from the longitudinal observation in the SONIC study. *Geriatrics & Gerontology International* 23(5): 334-340.
- Choe, H., Gondo, Y., Kasuga, A., Masui, Y., Nakagawa, T., Yasumoto, S., Ikebe, K., Kamide, K., Kabayama, M., Ishizaki, T. 2023. The relationship between social interaction and anxiety regarding COVID-19 in Japanese older adults. *Gerontology & Geriatric Medicine* 9: 1-7.
- Yamaguchi, R., Kawahara, T., Kotani, T., Yazawa, R., Suzuki, A., Kano, Y., Ishii-Takahashi, A. 2023. The effectiveness of exercise programs accessible from home on children's and adolescents' emotional well-being: Systematic review & meta-analysis. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports* 2(2): e103.
- 筒井淳也. 2023. 子育て支援と晩婚化・未婚化対策の同時推進を. 月刊公明 6(210): 16-21.
- 新本万里子. 2023. フィールドの月経を知る・語る. 月刊みんぱく 47(6): 2-3.
- Ikeda, Y., Egawa, M., Ohsuga, T., Mandai, M., Takahashi, Y., Nakayama, T. 2023. Relationship of ethinylestradiol/drospirenone prescription on work productivity and activity impairment among women with menstruation-related symptoms: A multicenter prospective observational study. *Journal of Occupational and Environmental Medicine* 65(7): e491-e495.
- Kasai, Y. 2023. Visualization and analysis of small place names in Japan using data from official surveys and cadastral maps from the Meiji era: A case study of Koaza names in Ritto city, Shiga prefecture, Japan. *Art Research* 24(1): 3-18.
- 小池進介. 2023. 統合失調症の階層的データ解析. 医学のあゆみ 286(6): 570-576.
- 木村亮. 2023. ウリアムズ症候群の臨床的特徴とその対応. 精神科治療学 38(8): 887-893.
- Kawagoe, T., Teramoto, W. 2023. Mask wearing provides psychological ease but does not affect facial expression intensity estimation. *Royal Society Open Science* 10(8): 230653.
- 菊地亜華里, 石岡良子, 小川まどか, 増井幸恵, 神出計, 池邊一典, 石崎達郎, 新井康通, 権藤恭之. 2023. 高齢者の余暇活動実施状況——性別・居住地域・居住形態との関連. 応用老年学 17(1): 32-41.
- 胡益順. 2023. ダブルケアラーのソーシャル・サポート・ネットワークの類型——インフォーマル・サポートとフォーマル・サポートの組み合わせに着目して. 理論と方法 38(1): 29-43.
- 江川美保. 2023. 【プレコンセプションケア】産前産後の食生活——微量栄養素を中心に. 日本医師会雑誌 152(6): 621-625.
- 李正連. 2023. 韓国平生教育法24年の歩みと成果. 東アジア社会教育研究 28: 123-140.
- 石井山竜平, 山口香苗, 崔一先, 布施利之, 佐々木さつき, 大安喜一, 牛来学. 2023. 台北・基隆社区大学調査(2023)報告. 東アジア社会教育研究 28: 163-188.
- Takiguchi, Y., Matsui, M., Kikutani, M., Ebina, K. 2023. Development of leisure scores according to mental, physical, and social components and investigation of their impacts on mental health. *Leisure Studies* in press.
- 前田信彦. 2023. 女性の職業キャリアにおける管理職経験と定年後のライフスタイル. 立命館産業社会論集 59(2): 1-19.
- Chu, W.M., Nishita, Y., Tange, C., Zhang, S., Furuya, K., Shimokata, H., Otsuka, R., Lee, M.C., Arai, H. 2023. Association of a lesser number of teeth with more risk of developing depressive symptoms among middle-aged and older adults in Japan: A 20-year population-based cohort study. *Journal of Psychosomatic Research* 174: 111498.
- Nakayama, M., Hatanaka, C., Suzuki, Y., Sugihara, Y. 2023. Generational differences in the image of text-based online counseling: Text analysis with deep learning technology. *Psychologia* 65(1): 100-129.
- Mihara, M., Izumika, R., Tsukiura, T. 2023. Remembering unexpected beauty: Contributions of the ventral striatum to the processing of reward prediction errors regarding the facial attractiveness in face memory. *NeuroImage* 282: 120408.
- Sala, G., Nishita, Y., Tange, C., Zhang, S., Fujiko, A., Shimokata, H., Otsuka, R., Arai, H. 2023. Differential longitudinal associations between domains of cognitive function and physical function: A 20-year follow-up study. *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences* in press.
- 菊澤佐江子, 植村良太郎. 2023. 家族介護・就業と健康の関連——中高年女性のパネルデータ分析. 厚生指標 70(12): 10-16.
- Fujii, Y., Kuroda, N., Teraoka, R., Harada, S., Teramoto, W. 2023. Age-related differences in temporal binding and the influence of action body parts. *i-Perception* 14(5).
- 大安喜一. 2023. タイのノンフォーマル教育における持続可能な開発に向けた学習. 日本の社会教育 67: 231-243.
- Sato, K., Matsui, M., Ono, Y., Miyagishi, Y., Tsubomoto, M., Naito, N., Kikuchi, M. 2023. The relationship between cognitive reserve focused on leisure experiences and cognitive functions in bipolar patients. *Heliyon* 9(11): e21661.
- 筒井淳也. 2023. 家族のアップデートはいかにして可能か. 世界12月号: 88-97.

## 図書

- 重田眞義. 2021. 「エンセーテ」. 『世界の食文化百科事典』. 丸善出版, pp.60-61.
- 江川美保. 2021. 第2章「婦人科疾患—A 月経異常 6月経前症候群」. 吉川史隆, 大須賀稜, 杉山隆(編). 『産科婦人科疾患最新の治療 2022-2024』. 南江堂, pp.154-156.
- 伏木香織. 2021. 「変わるスリンの指穴——ものと演奏行為の相互作用」『音楽の未明からの思考——ミュージッキングを超えて』. アルテス・パブリッシング, pp.210-227.
- 座馬耕一郎. 2022. 「離合集散が織りなす集団の動態——ヒトとチンパンジーの社会にみる概日性多相集団」. 河合香史(編). 『関わる・認める』. 京都大学学術出版会, pp.237-267.
- 佐藤一子, 大安喜一, 丸山英樹(編著). 2022. 『共生への学びを拓く——SDGsとグローバルな学び』. エイデル研究所.
- 江川美保. 2022. 第1章「Q03 月経困難症の診断と対応は?」「Q04 月経前症候群の診断と対応は?」. 井上真智子(編著). 『Q&Aで学ぶジュネラリストのための女性診療BASIC』. 金芳堂, pp.24-28, 29-34.
- 大橋敦子(監修). 鍵谷法子, 金澤佑治, 森田恵子, 二本松明, 斉藤光代, 下井俊典, 志村まゆら, 鈴木敦子, 鈴木郁子, 内田さえ. 2023. 『生理学実習NAVI 第3版』. 医歯薬出版.
- 筒井淳也. 2023. 『数字のセンスを磨く——データの読み方・活かし方』. 光文社新書.
- 松井三枝, 緑川晶(編). 2023. 『脳の働きに障害を持つ人の理解と支援——高次脳機能障害の実際と心理学の役割』. 誠信書房.
- 滝口雄太, 蝦名昂大, 松井三枝. 2023. 認知的加齢における仕事の複雑性指標の再考——日本版DOTと日本版O-NETを用いて. 心理学の諸領域 12(1): 202306.
- Hidaka, S., Takeshima, M., Kawagoe, T. 2023. No relationships between frequencies of mind wandering and perceptual rivalry. *i-Perception* 14(6): 1-14.
- 山本秀樹, 大安喜一. 2023. アフリカ地域において国連持続可能な開発目標(SDGs)を達成するために生涯学習推進拠点としてのCommunity Learning Center(CLC)推進への示唆. 公民館学会年報 20: 112-119.
- 松田英子. 2023. 明晰夢の階層性に関する予備的研究——創作活動および芸術鑑賞活動に関心のある社会人の自覚夢と制御夢のデータ分析から. 東洋大学社会学部紀要 61(1): 53-62.
- 渡邊大輔. 2024. 高齢期における生活時間の複雑性とその規定因. アジア太平洋研究 48: 51-64.
- 渡邊大輔. 2024. 生活支援コーディネーターの活動とその課題. 老年社会科学 45(4): 371-378.
- 峯岸朋弥, 大澤博隆, 宮本道人, 藤本敦也, 西中美和. 2024. 創作を用いたワークショップにおける参加者の発話分析——未来ビジョン形成のための発散と議論手順の重要性. グローバルビジネスジャーナル in press.
- 松田英子, 川瀬洋子. 2024. 悪夢を主訴とする高校生へのイメージエクスポージャーとイメージリスキプトの適用. カウンセリング研究 26(2) in press.
- Miura, T., Yabu, K. 2023. Narrative review of assistive technologies and sensory substitution in people with visual and hearing impairment. *Psychologia* 2022-B031: 1-30.
- Hirai, M., Ikeda, A., Kato, T., Ikeda, T., Asada, K., Hakuno, Y., Kanae, M., Awaya, T., Okazaki, S., Kato, T., Heike, T., Hagiwara, M., Yamagata, T., Tomiwa, K., Kimura, R. 2023. Comparison of the sensory profile among autistic individuals and individuals with Williams syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders* in press.



子(編著).『語り継ぐ経験の居場所——排除と構築のオラリティ』. 新曜社, pp.219–249.

石井礼花. 2023.『悩む親に子への接し方をトレーニング』. 朝日新聞取材班.『発達「障害」でなくなる日』. 朝日新書,

## 国際学会

Harada, E.T., Takawaki, R., Sawada, T., Okabe, R., Nakao, N. Chattering with a young partner can facilitate older adults' trustworthiness learning: Comparison between inter-and intra-generational communication, The Annual Meeting of Psychonomic Society, 4–7 November 2021 (online).

Uchida, S., Morihara, D., Moriya, J., Kagitani, F. A pilot study for early diagnosis of cognitive frailty in older adults. The 8th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Nagoya, Japan, 27–28 October 2022.

Kikutani, M., Matsui, M., Takiguchi, Y., Ebina, K. A new script memory test and its relationship with personality, daily functioning, and cognitive abilities, Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, Atlanta, USA, 25 February 2023.

Zamma, K. Biological and cultural diversity of sleep and our view of sleep. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, Japan, 19–20 March 2023.

Kawasaki, M. Behavioral synchronization and EEG synchronization for human-human communication. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, Japan, 19–20 March 2023.

Oyasu, K. Aspects of lifelong learning society and its policies. International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, Japan, 19–20 March 2023.

Egawa, M. Self-monitoring Using a Smartphone App for Managing Premenstrual Syndrome: Testing a Novel Tool for Empowering Reproductive-aged Women to Improve Healthcare Outcomes, International Symposium on Lifelong Sciences, Kyoto, Japan, 19–20 March 2023.

Kimura, R. Williams syndrome: Clinical features, diagnosis, and management, The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, Japan, 26–28 May 2023.

Egawa, M. Total healthcare for Mothers in gynecological practice: Focusing on the menstruation-associated symptoms, The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Kyoto, Japan, 26–28 May 2023.

Kikuzawa, S. Social roles and age identity among Japanese men and women in late adulthood, The 14th Asian Conference on the Social Sciences, Tokyo, Japan, 26–29 May 2023 (hybrid).

Shi, J., Wang, S., Matsuda, E. A Study on personality traits of people who recall nightmares: A comparison of Japanese and Chinese undergraduates in relation to the Big Five, 10th World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies, Seoul, Korea, 1–4 June 2023.

Matsuda, E. Effects of image rescripting on nightmare reduction in Japanese elementary school students using a web-based experiment, 10th World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies, Seoul, Korea, 1–4 June 2023.

Watanabe, D. Do older worker experience active aging or precarious aging?, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Kasuga, A., Yasumoto, S., Nakagawa, T., Ishioka, Y., Kikuchi, A., Inagaki, H., Ogawa, M., Hori, N., Masui, Y., Choe, H., Muto, H., Kabayama, M., Godai, K., Ikebe, K., Kamide, K., Ishizaki,

pp.126–129.

筒井淳也. 2023.『未婚と少子化 この国で子どもを産みにくい理由』, PHP新書.

T., Gondo, Y. Older adults' social interaction changes during the COVID-19 pandemic, IAGG Asia/Oceania Regional congress 2023, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Maeda, N. Contact with nature and cosmic level of gerotranscendence of elderly Japanese people, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Nishita, Y., Nakamura, A., Kato, T., Tange, C., Zhang, S., Furuya, K., Sala, G., Ando, F., Shimokata, H., Otsuka, R., Arai, H. Age-related hippocampal volume change after middle age: A 10-year follow-up study, IAGG Asia/Oceania Regional congress 2023, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Kasai, Y. Older Adults' civic engagement in various way: Based on their life histories and local newsletters, XX International Sociological Association World Congress of Society, Melbourne, Australia, 25 June–1 July 2023.

Kasai, Y. Voluntary Association as a predecessor of resident self-governing bodies in Japan, XX International Sociological Association World Congress of Society, Melbourne, Australia, 25 June–1 July 2023.

Kuroda, N., Teraoka, R., Harada, S., Teramoto, W. Effect of postural instability on passable width perception in older adults, The 21st International Multisensory Research Forum, Brussels, Belgium, 27–30 June 2023.

Teraoka, R., Kojima, R., Kuroda, N., Teramoto, W. Anisotropy of audiotactile peripersonal space between rear and front space, The 21st International Multisensory Research Forum, Brussels, Belgium, 27–30 June 2023.

Nakayama, M., Uricher, R., Koh, A., Uchida, Y. Cultural and age differences in trait awe and its relation to wellbeing, 2023 Macropsychology Summit on Societal Development & Societal Well-Being, Warsaw, Poland, 28 June 2023.

Park, P., Mouri, H., Masuda, Y., Ueda, K., Ueno, S., Ubukata, S., Murai, T., Tsukiura, T. Accelerated long-term forgetting in patients with diffuse axonal injury, International Neuropsychological Society 2023 Taiwan Meeting, Taipei, Taiwan, 6–8 July 2023.

Ebina, K., Matsui, M., Kinoshita, M., Saito, D., Takiguchi, Y., Nakada, M. Resting-state functional connectivity associated with postoperative cognitive function and white matter tract disconnection in patients with brain tumors, 2023 International Neuropsychological Society Taiwan Meeting, Taipei, Taiwan, 7 July 2023.

Shi, J., Wang, S., Matsuda, E. Investigating personality traits of those who recall lucid dreams: A comparison of undergraduates from China and Japan regarding the Big Five, IPPA World Congress 2023, Vancouver, Canada, 20–23 July 2023.

Matsuda, E. Effects of image rescripting on nightmare reduction in University students Comparison between Japanese and Canada using a web-based experiment, IPPA World Congress 2023, Vancouver, Canada, 20–23 July 2023.

Nishiyama, S., Nakayama, M. Measuring episodic memory in daily life: An approach with deep learning technology for natural language processing, 23rd Conference of the European Society for Cognitive Psychology, Porto, Portugal, 6–9 September

2023.

Takahashi, K., Inoue, Y., Kitazaki, M. Effects of source location, loudness, and understanding of speech on interpersonal distance in a virtual environment, The 29th ACM Symposium on Virtual Reality Software and Technology (VRST 2023), Christchurch, New Zealand, 9–11 October 2023.

Kamo, A., Mihara, M., Tsukiura, T. Neural representation modulated by impression of trustworthiness generated from social interaction in memory for other persons, 52th annual meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2023), Washington DC, USA, 11–15 November 2023.

Mihara, M., Izumika, R., Tsukiura, T. Neural mechanisms underlying the effect of prediction errors in facial attractiveness between masked and unmasked faces on face memories in young and older adults, 52th annual meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2023), Washington DC, USA, 11–15 November 2023.

## 国内学会

大須賀拓真, 江川美保, 池田裕美枝, 植田彰彦, 最上晴太, 千草義継, 万代昌紀, 鉄欠乏に着目した周産期メンタルヘルスの実態——パイロット研究, 第22回京都女性のヘルスケア研究会, 京都, 2021年10月10日.

池田裕美枝, 江川美保, 大須賀拓真, 高橋由光, 中山健夫, 万代昌紀, 8項目のPMS評価尺度である短縮版DRSPは、PMS症状による生活支障のスクリーニングに利用できる, 第36回日本女性医学学会学術集会, 大阪, 2021年11月6日–7日.

大須賀拓真, 江川美保, 池田裕美枝, 植田彰彦, 最上晴太, 千草義継, 万代昌紀, 妊娠初期における貧血のない鉄欠乏と周産期のうつ症状との関連——パイロット研究, 第36回日本女性医学学会学術集会, 大阪, 2021年11月6日–7日.

池田裕美枝, 高橋由光, 中山健夫, 月経困難症に対する低用量ピル処方開始後の、労働生産性低下や日常活動障害の変化, 第80回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021年12月21日–23日.

Ikeda, Y., Egawa, M., Ohsga, M., Mandai, M. Effects of oral estradiol/drospirenone on reducing work productivity impairment: Prospective cohort study, 第74回日本産科婦人科学会学術講演会, 福岡, 2022年8月5日–7日.

大須賀拓真, 江川美保, 紀井美慧, 池田裕美枝, 植田彰彦, 最上晴太, 千草義継, 万代昌紀, 妊娠初期の鉄・亜鉛欠乏と周産期うつ症状との関連, 第74回日本産科婦人科学会学術講演会, 福岡, 2022年8月5日–7日.

守屋樹羅, 内田さえ, 鍵谷方子, 嗅皮質のアセチルコリン放出に対する前脳基底部刺激の影響, 第75回日本自律神経学会総会, さいたま, 2022年10月27日–28日.

池田裕美枝, 大須賀拓真, 江川美保, 万代昌紀, LEP開始後に心身症状が悪化する患者の頻度・特性・予測可能性, 第37回日本女性医学学会学術集会, 米子, 2022年11月12日–13日.

大須賀拓真, 江川美保, 池田裕美枝, 万代昌紀, 健康女性における月経周期に伴う自律神経活動の変動の検討——PMS/PMDDの客観的指標の探索に向けて, 第37回日本女性医学学会学術集会, 米子, 2022年11月12日–13日.

守屋樹羅, 森原大智, 鍵谷方子, 内田さえ, 前脳基底部刺激が嗅皮質のアセチルコリン放出におよぼす影響, 第49回自律神経生理研究会, 名古屋, 2022年12月3日.

原田悦子, 澤田知恭, レジリエンスという視点から見る「会話」, 第5回犬山認知行動研究会議, 東京, 2023年1月7日.

権藤恭之, 人生最晩年における心理的適応の様相2, 日本発達心理学会第34回大会 シンポジウム「成人期・高齢期における発達の最適化とWell-being——発達, 社会, 臨床的知見に

Nishimura, T., Kimura, R., Suzuki, R.S., Li, Y., Maegawa, S., Hagiwara, M. Crosstalk between gut microbiota and host response in autism associated dyrk1a mutant of zebrafish, 52th annual meeting of the Society for Neuroscience (Neuroscience 2023), Washington DC, USA, 11–15 November 2023.

Murakami, T., Kitazaki, M. Design of body transformation experience, ICAT-EGVE 2023, Dublin, Ireland, 6–8 December 2023.

Hapuarachchi, H., Inoue, Y., Kitazaki, M. Exploring embodiment and usability of autonomous prosthetic limbs through virtual reality, SIGGRAPH Asia 2023, Sydney, Australia, 12–15 December 2023.

Miura, T., Fujii, H., Yamazaki, R., Erdenesambuu, D., Matsuo, M., Sakajiri, M., Onishi, J. Accessible terminal application for visually impaired users utilizing screen readers, 39th Annual CSUN Assistive Technology Conference (CSUN ATC 2024), California, USA, 18–22 March 2024.

よる理解と支援」, 大阪, 2023年3月3日–5日.

春日彩花, COVID-19感染流行下における高齢者のライフスタイルの長期的な変化, 日本発達心理学会第34回大会 ラウンドテーブル「成人・高齢期のコロナ下における地域、職場、家庭での人間関係の変化と適応」, 大阪, 2023年3月3日–5日.

小川まどか, 中年期から高齢期にかけての仕事と余暇活動, 日本発達心理学会第34回大会 シンポジウム「高齢者の日常生活研究の新展開——生活に根ざした実践心理学と基礎心理学の架橋」, 大阪, 2023年3月3日–5日.

Li, W. 介護扶養意識の分析——規範とニーズに注目して, 第74回数理学会大会, つくば, 2023年3月7日–8日.

韓天放, 宮崎淳, 丁同芳, 松田哲也, 石原暢, 若年成人の睡眠習慣と脳構造の関係, 日本体力医学会 第37回近畿地方会, 大阪, 2023年3月11日.

丁同芳, 宮崎淳, 韓天放, 松田哲也, 石原暢, 若年成人の体力および心血管リスクマーカーと脳構造・機能の関係, 日本体力医学会 第37回近畿地方会, 大阪, 2023年3月11日.

會田純平, 三浦貴大, 藪謙一郎, 中津真美, 聴覚障害者のレジリエンス獲得要因——当事者同士の関わりの構築に着目して, 日本リハビリテーション連携科学学会 第24回大会, さいたま, 2023年3月12日.

森原大智, 守屋樹羅, 鍵谷方子, 内田さえ, 嗅覚刺激による脳血流反応の解析, 第17回環境生理学プレングレス, 京都, 2023年3月13日.

守屋樹羅, 森原大智, 鍵谷方子, 内田さえ, 嗅皮質に投射する前脳基底部コリン作動性神経機能の解析, 日本生理学会第100回記念大会, 京都, 2023年3月14日–16日.

小池進介, Bi-directional translational approach from the findings in human neuroimaging studies, 日本生理学会第100回記念大会, 京都, 2023年3月14日–16日.

丹羽朋子, 中国芸術人類学の課題と可能性——資源・身体・協働の先へ, 民族芸術学会第39回大会, 名古屋, 2023年4月22日–23日.

児玉菜, 統合スタイルに影響を与える社会的要因に関する報告——子ども期の社会的要因に着目して, 第74回関西社会学会大会, 京都, 2023年5月13日–14日.

鈴木敦命, 顔に基づく知性判断における表情・構造手がかりの使用と人相学的信念の関連, 日本感情心理学会第31回大会, 松山, 2023年5月26日–28日.

竹山和弘, 木村敏, 笠井賢紀, 住み継ぐまちづくりに向けた住まいの記憶史調査とその方法論の構築(1)——地域課題に向けた調査成果の活用についての考察, 日本生活学会第50回

研究発表大会，横浜，2023年6月11日。

木村敏，竹山和弘，笠井賢紀，住み継ぐまちづくりに向けた住まいの記憶史調査とその方法論の構築(2)——記憶に基づく住まいの保存・改修，日本生活学会第50回研究発表大会，横浜，2023年6月11日。

笠井賢紀，木村敏，竹山和弘，住み継ぐまちづくりに向けた住まいの記憶史調査とその方法論の構築(3)——住まいとパブリックヒストリー，日本生活学会第50回研究発表大会，横浜，2023年6月11日。

岩浅優花，笠井賢紀，家庭相談員の価値観形成過程——滋賀県相談員への調査を通じて，日本生活学会第50回研究発表大会，横浜，2023年6月11日。

小池進介，脳画像研究の進歩に精神科医はどう対応していくべきか？，第119回日本精神神経学会学術総会，横浜，2023年6月22日-24日。

四方篤，新本万里子，徳山奈帆子，佐々木綾子，保坂哲朗，杉田映理，フィールドワーク中の月経対処と配慮の実態・意識——フィールド系学会会員への質問票調査より，第33回日本熱帯生態学会年次大会(JASTE 33)，高知，2023年6月23日-25日。

池田裕美枝，江川美保，Japanese premenstrual syndrome screening tool(J-PMSS)の開発，第64回日本心身医学会学術講演会，横浜，2023年7月1日-2日。

吉村道孝，志賀希子，北沢桃子，綾部直子，江口洋子，若年から高齢者までを対象とした主観的認知機能に関連する要因の検討，第20回日本うつ病学会総会，仙台，2023年7月21日。

志賀希子，吉村道孝，北沢桃子，綾部直子，江口洋子，若年から高齢者までを対象とした死の不安・恐怖とうつ症状の関連の検討，第20回日本うつ病学会総会，仙台，2023年7月21日。

渡邊大輔，現代における年齢規範とその規定因の探索，第75回数理社会学会大会，名古屋，2023年8月25日-26日。

岩瀬裕子，生活に埋め込まれた「異質な身体」の集合が生み出す多様性——スペイン・カタルーニャの「人間の塔」を事例に，日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会 スポーツ文化研究部会シンポジウム「『多様性』を実践するとは——その理想と難しさの狭間で」，京都，2023年8月30日-9月1日。

野山広，城之内庸仁，大安喜一，リテラシー調査——海外の事例、調査結果の活用，基礎教育保障学会第8回研究大会，福岡，2023年9月2日-3日。

蝦名昂大，松井三枝，木下雅史，齋藤大輔，滝口雄太，中田光俊，脳腫瘍患者における術後視覚性注意と視空間性ワーキングメモリに対する上縦束の損傷と保護的因子の影響，第47回日本神経心理学学会学術集会，高知，2023年9月7日-8日。

吉原勝，松田英子，高等特別支援学校生徒の睡眠と学校適応に関する予備的調査——睡眠と健康教育，日本パーソナリティ心理学第32回大会，金沢，2023年9月9日-10日。

松田英子，松岡和生，高明晰夢想起者の夢体験時の認知・神経活動——睡眠実験室におけるREM期中途覚醒法を用いた検討，日本パーソナリティ心理学第32回大会，金沢，2023年9月9日-10日。

中村純也，北崎充晃，足裏振動を用いたバーチャル歩行体験における観察姿勢の効果，第28回日本バーチャルリアリティ学会大会，八王子，2023年9月12日-14日。

坂田龍星，中村純也，北崎充晃，仰向け姿勢での鉛直情報の視覚刺激提示がバーチャル歩行感覚に与える効果，第28回日本バーチャルリアリティ学会大会，八王子，2023年9月12日-14日。

高橋宏太，北崎充晃，バーチャルアバターの声量による歩行経路の制御，第28回日本バーチャルリアリティ学会大会，八王子，2023年9月12日-14日。

松田英子，夢の行動化を伴うレム睡眠行動障害——中高年者の

夢における行動の分析，第31回日本行動科学学会年次大会，京都，2023年9月14日。

滝口雄太，松井三枝，蝦名昂大，加齢に伴う認知機能とウェルビーイングの関係——認知予備力の緩和効果に関するライフコースアプローチ，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

鈴木敦命，石川健太，大久保街亜，顔に基づく信頼性判断の年齢関連差を媒介する認知的変数，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

日高聡太，川越敏和，浅井暢子，寺本渉，高齢者の日常生活における感覚の困りごと，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

寺本渉，音声知覚における見えない視覚情報の影響の加齢変化，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

西田裕紀子，本邦におけるpsychological well-being研究の展開——調査研究から実践的なアプローチまで，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

松岡和生，川原正廣，松田英子，ハイパーファンタジアとしての直観像素質者のfNIRS安静時脳機能結合の特性，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

松田英子，松岡和生，新型コロナウイルス感染状況下における大学生の夢見の変容(3)——ポストウィズコロナ生活とパンデミックドリームを含む夢内容の関連の分析，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日-17日。

小池進介，「D236-2 光トポグラフィー(2)抑うつ症状の鑑別診断の補助に使用するもの」には何が足りなかったのか？，第42回日本精神科診断学会，富山，2023年9月22日-23日。

赤城拓，児童虐待発生確率に対する現金給付の効果——JACSIS調査データを用いた計量分析，社会政策学会第147回大会，京都，2023年10月7日-8日。

松田英子，イメージリクリプトによる大学生の悪夢低減効果の予備的検討——日本およびカナダの大学生によるWEB実験上のセルフIR，日本認知・行動療法学会第49回大会，札幌，2023年10月7日-9日。

渡邊大輔，高度経済成長期における女性の老い——1963年「神奈川県高齢者生活実態調査」の復元による2次分析，第96回日本社会学会大会，東京，2023年10月8日-9日。

田中慶子，親子の情緒関係の世代間連鎖——3世代調査の分析(3)，第96回日本社会学会大会，東京，2023年10月8日-9日。

西田裕紀子，Aging wellのための3つの秘訣——心理学からのメッセージ，第68回日本聴覚医学会総会・学術講演会，佐倉，2023年10月11-13日。

笠井賢紀，『神宮御師資料』に基づく御師配札圏域のGISツールによる可視化——伊勢講組織化の分析に向けて，日本民俗学会第75回年会，東京，2023年10月21日-22日。

渡邊大輔，ライフコースの脱標準化は年齢規範の変容をとまなうのか，第18回日本応用老年学会大会，豊中，2023年10月28日-29日。

小池進介，大規模・疾患横断脳MRI研究を起点とした階層性データ解析，第45回日本生物学的精神医学会年会，名護，2023年11月6日-7日。

杉田映理，岩佐光広，小國和子，飯嶋秀治，新本万里子，鈴木幸子，現代日本の文脈に即した「包括的な月経教育」の在り方の検討——文化人類学の視点から，日本学校保健学会第69回学術大会，東京，2023年11月10日-12日。

大須賀拓真，江川美保，露木香，植田彰彦，小松摩耶，千草義継，最上晴大，万代昌紀，妊娠前のPMS/PMDDと周産期うつ症状との関連についての当院での実態調査，第38回日本女性医学学会学術集会，徳島，2023年12月2日-3日。

池田裕美枝，江川美保，露木香，大須賀拓真，万代昌紀，前向き症状記録と定期的なセルフケアアドバイスはPMSの負担感を減少させるか——オンラインによる準ランダム化比較試験，

第38回日本女性医学学会学術集会，徳島，2023年12月2日-3日。

露木香，江川美保，大須賀拓真，植田彰彦，縞田一輝，植野司，日吉和子，上田敬太，万代昌紀，機械学習を用いたPMS/PMDD発現に関連する因子の探索，第38回日本女性医学学会学術集会，徳島，2023年12月2日-3日。

滝口雄太，蝦名昂大，松井三枝，仕事の複雑性はどのような認知機能領域に影響をもたらすのか——職業情報データベースO\*NETを用いた検討，北陸心理学会第58回大会，野々市，2023年12月9日。

Zhou, Y., Matsui, M., Ebina, K., Takiguchi, Y., Kinoshita, M., Nakada, M. Correlation between physical, cognitive, and social

## 講演

江川美保，婦人科がんサバイバーの心と身体を支えるために，FUJI women's health regional webinar vol. 1，2021年9月24日(オンライン)。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，Tsumura Medical Site Kampo Online Seminar，2021年9月30日(オンライン)。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，第68回南加賀地区漢方研究会，小松，2021年10月13日。

江川美保，教育講演3 PMS/PMDDに対する包括的ヘルスケア診療の考え方，第36回日本女性医学学会学術集会，大阪，2021年11月6日-7日。

江川美保，PMS女性のみかた——PMDDの診療を通して学んだこと，第33回播磨産婦人科漢方研究会，姫路，2021年11月11日。

江川美保，指定講演14：月経前症候群(PMS)／月経前不快感分障害(PMDD)のマネジメント，第31回臨床内分泌代謝Update，大阪，2021年11月26日。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，北信・更埴産婦人科医会オンライン講演会，2021年12月2日(オンライン)。

江川美保，月経前不快感分障害(PMDD)をめぐる精神科——産婦人科診療連携の必要性，こころとからだについて考える，2022年1月20日(オンライン)。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，相模原市産婦人科医会学術講演会，2022年1月27日(オンライン)。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，第4回熊本産婦人科桃李会，2022年2月17日(オンライン)。

江川美保，PMS/PMDDに対する包括的ヘルスケア診療の考え方，滋賀県精神科診療所協会講演会，2022年3月5日(オンライン)。

江川美保，漢方療法を通して再考する月経前症候群(PMS)へのアプローチ，第18回茨城県産婦人科漢方学術講演会，2022年3月24日(オンライン)。

江川美保，女性をエンパワーする月経困難症治療，第30回生殖医学研究会講演会，2022年5月20日(オンライン)。

江川美保，女性の味方になる漢方治療，宇治久世医師会学術講演会，2022年5月21日(オンライン)。

江川美保，PMS/PMDDに対する包括的ヘルスケア診療の考え方——難治症例への対応から学んだこと，東海女性フォーラム2022，名古屋，2022年6月11日。

江川美保，今どきの月経トラブル対処法——もうガマンはしない！，NPO法人エビデンスベーストヘルスケア協議会 第134回情報素材理事会，2022年6月16日(オンライン)。

渡邊大輔，「生涯学の創出」を事例とした学際的研究の現状と課題，日本老年社会学会第64回大会 シンポジウム「『学際的』な老年学研究のこれまでとこれから——自分の『領域』をどのよう

components in leisure activities and functional connectivity of resting-state brain network in healthy people，北陸心理学会第58回大会，野々市，2023年12月9日。

松田英子，施竣訳，明晰夢の想起と性格特性及びストレスコーピングの関連の検討，日本イメージ心理学会第24回大会，東京，2023年12月9日-10日。

施竣訳，松田英子，悪夢の想起と性格特性及びストレスコーピングの関連の検討，日本イメージ心理学会第24回大会，東京，2023年12月9日-10日。

小池進介，臨床研究とコホート研究の融合による脳画像に基づいた精神疾患未病同定の試み，第97回日本薬理学会年会，神戸，2023年12月14日-16日。

に越えるのか？」，東京，2022年7月2日。

江川美保，働く女性と月経前症候群，第29回日本産業精神保健学会 シンポジウム3「女性の悩みと産業メンタルヘルス」，2022年7月9日(オンライン)。

江川美保，更年期のみかた，NPO法人エビデンスベーストヘルスケア協議会 第135回情報素材理事会，2022年7月28日(オンライン)。

江川美保，婦人科医が診る頭痛，これからの頭痛診療を考える会，2022年9月1日(オンライン)。

江川美保，難治性PMS症例への漢方療法を通して再考する 包括的ヘルスケアの考え方，第41回産婦人科漢方研究会特別企画 漢方入門セミナー，京都，2022年9月3日。

江川美保，女性の味方になる漢方治療，中京東部医師会学術講演会，京都，2022年10月22日。

江川美保，更年期のみかた——エストロゲン欠乏とは異なる角度から，第35回栃木県更年期研究会，宇都宮，2022年10月26日。

内田さえ，視覚・嗅覚器の自律神経制御，第75回日本自律神経学会総会 シンポジウム「羞明や感覚器過敏に関する自律神経制御」，さいたま，2022年10月28日。

江川美保，ランチョンセミナー3 がんサバイバーと更年期のみかた，第37回日本女性医学学会学術集会，米子，2022年11月12日。

江川美保，PMS/PMDDに対する包括的ヘルスケア——精神科と産婦人科の協働をめざして，公益社団法人日本精神神経科診療所協会 令和4年度第12回自殺対策講演会，2023年2月12日(オンライン)。

柴田悠，こどもの未来を救う少子化対策，国会・衆議院・予算委員会・中央公聴会，東京，2023年2月16日。

柴田悠，「2025年」までに「追加6.1兆円(少子化対策関係予算6.1兆円の倍増)による即時策」を，こども政策の強化に関する関係府省会議(第3回)，東京，2023年2月20日。

江川美保，こころの健康を支える栄養と漢方，令和4年度女性の健康週間府民公開講座，京都，2023年3月5日。

内田さえ，嗅覚と認知機能の老化，日本生理学会第100回記念大会 シンポジウム「加齢に伴う生体機能低下と抗老化への多角的アプローチ」，京都，2023年3月15日。

石原暢，身体活動と認知機能——マルチモーダル脳画像指標を用いた検討，電気通信大学脳・医工学研究センターセミナー，東京，2023年3月22日。

西川一弘，地域と価値を共創する大学づくり——和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plus の挑戦，令和4年度岐阜大学地域協学センターシンポジウム「地域との協学」，岐阜，2023年3月22日。

新保敦子，絵本阅读与孩子的成长，北京師範大学「絵本阅读促進児童双語言發展的教学研究」外国文教專家項目，北京，中国，2023年3月28日。

Koike, S. Two gaps in clinical MRI study findings, IRCN Computational psychiatry workshop, Tokyo, 31 March 2023.

西川一弘, パネルディスカッション「地方創生×学びの化学反応」, 印南町・和歌山大学共創事業「まちなみキャンパス 印南のための生涯学習——まちとひとを豊かに」, 印南, 2023年4月22日.

筒井淳也, 日本における少子化対策の評価とあるべき方向性: 「人口減少 80万人割れの衝撃」(2), 日本記者クラブ, 東京, 2023年4月24日.

Oyasu, K. Community based learning for sustainable development, Ministry of Education Kenya, Nairobi, Kenya, 3 May 2023.

西川一弘, 和歌山大学と紀南の連携——実はここにも和歌山大学, 田辺はまゆうロータリークラブ例会, 田辺, 2023年5月16日.

西田裕紀子, 健康長寿社会における幸せな老い, 第124回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会, 福岡, 2023年5月19日.

Ishii-Takahashi, A. Medical support for Parents of children with neurodevelopmental disorders in healthcare facilities, Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions 2023 (ASCAPAP), Kyoto, Japan, 26–28 May 2023.

江川美保, 月経前症候群に対する包括的ヘルスケア, 第19回性差医療情報ネットワークセミナー, 2023年6月3日(オンライン).

権藤恭之, 人生100年時代のサクセスフルエイジング, 第23回日本抗加齢医学会総会, 横浜, 2023年6月11日.

江川美保, 生涯にわたる女性のヘルスケアを担う産婦人科から鉄欠乏対策の実践と発信を!, 第148回近畿産科婦人科学会学術集会, 和歌山, 2023年6月18日.

江川美保, 今どきの月経トラブル対処法——もうガマンはしない!させない!, 令和5年度京都市学校教育医会研修会, 2023年6月24日(オンライン).

江川美保, 鉄欠乏対策による女性ヘルスケアの土台づくり, 第93回京大連携わかさセミナー, 2023年6月29日(オンライン).

月浦崇, 高齢者群を対象とした脳機能計測研究実践, 日本認知心理学会第21回大会 ベーシック&フロンティアセミナー「多様な発達段階を対象とした知覚・認知研究を考える」, 2023年6月30日(オンライン).

寺本渉, 高齢者群を対象とした行動研究実践, 日本認知心理学会第21回大会 ベーシック&フロンティアセミナー「多様な発達段階を対象とした知覚・認知研究を考える」, 2023年6月30日(オンデマンド).

江川美保, 月経随伴症状——今の治療は、未来をも拓く, 西宮市・芦屋市産婦人科医会研修会, 西宮, 2023年7月1日.

江川美保, 鉄欠乏対策による女性ヘルスケアの土台づくり, 相模原市産婦人科医会学術講演会, 2023年7月6日(オンライン).

江川美保, 女性のトータルヘルスの向上は鉄欠乏対策から, ASKA Gynecology Talk, 2023年7月13日(オンライン).

月浦崇, 「生涯学」の創出へ向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究, 第19回「必須脂肪酸と健康」研究会, 京都, 2023年7月28日(ハイブリッド).

木村亮, 神経発達症のゲノム医学研究——希少疾患からのアプローチ, 大阪大学大学院 連合小児発達学研究科セミナー, 大阪, 2023年8月29日.

江川美保, 漢方療法を通して再考する月経前症候群へのアプローチ, 渋谷区医師会学術講演会, 2023年9月28日(オンライン).

丹羽朋子, 手づくりから手工業へ——ECが写したものづくり技術, 映像のフィールドワーク展 vol. 2 ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ, 東京, 2023年10月1日.

中山真孝, テキスト分析が可能にする感情のマイクロセンシング, サイエンスカレッジ(京都大学 こころの科学ユニット 産学連携コンソーシアム), 2023年10月3日(オンライン).

筒井淳也, 処置のジレンマ——因果推論における意味の問題, 第96回日本社会学会大会シンポジウム「社会学における『因果』——方法論横断的対話を目指して」, 東京, 2023年10月9日.

月浦崇, 「生涯学」の創出に向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究, 第38回日本老年精神医学会,

東京, 2023年10月13日.

木村亮, ウィリアムズ症候群の加齢と合併症について, エルフィン関西(日本ウィリアムズ症候群の会)交流会, 大阪, 2023年10月22日.

Tsutsui, J. The declining trend of birth rate and marriage: The case of Japan, International Comparative Study on Giving Births and Family in the Era of Falling Fertility Rates—Japan, Taiwan, the Netherlands, Sweden, Korea—, Seoul, Korea, 25 October 2023.

月浦崇, 認知予備力からみる超高齢社会における新しい生涯観, 第47回日本高次脳機能障害学会学術総会シンポジウム「発達と加齢の高次脳機能——認知予備力が活きる生涯の理解と実践」, 仙台, 2023年10月29日.

松井三枝, 認知予備力の概念とその臨床的理解, 第47回日本高次脳機能障害学会学術総会シンポジウム「発達と加齢の高次脳機能——認知予備力が活きる生涯の理解と実践」, 仙台, 2023年10月29日.

江口洋子, 超高齢者のaging in placeにおける認知機能の役割, 第47回日本高次脳機能障害学会学術総会シンポジウム「発達と加齢の高次脳機能——認知予備力が活きる生涯の理解と実践」, 仙台, 2023年10月29日.

三浦佳代子, 高齢者の認知機能維持・向上に向けた最新アプローチ——認知予備力、ICTの視点から, 第47回日本高次脳機能障害学会学術総会シンポジウム「発達と加齢の高次脳機能——認知予備力が活きる生涯の理解と実践」, 仙台, 2023年10月29日.

岩瀬裕子, 人生の中でともに「つくる」経験——スペイン・カタルーニャの「人間の塔」づくりから, 日本スポーツ人類学会・2023年度第2回「スポじんサロン」, 2023年11月11日(オンライン).

江川美保, 漢方療法を通して再考する月経前症候群へのアプローチ, 女性のミカタKAMPO Seminar, 仙台, 2023年11月16日.

Oyasu, K. Community based learning for promoting lifelong learning, Universitas Negeri Semarang, Semarang, Indonesia, 17 November 2023.

江川美保, 鉄欠乏対策による女性ヘルスケアの土台づくり, 石川県産婦人科医会学術研修会, 2023年11月17日(オンライン).

新保敦子, 日本の科学絵本的多元可能性, 絵本課程与教育学研討会, 北京, 中国, 2023年12月1日.

新保敦子, 日本“东洋教育史研究”的现状和课题: 以日本教育史学会“东洋”研究动向为中心, 中外教育现代化道路的历史与比较研究国际学术研讨会, 北京, 中国, 2023年12月2日.

新保敦子, 災害与教育—东日本大地震经验考察, 第六届世界教育前沿論壇, 香港, 中国, 2023年12月2日.

上野景三, 「公民館研究50年」と公民館学会20年の到達と課題, 日本公民館学会学会設立20周年シンポジウム「『公民館研究50年』と公民館学会20年の到達と課題」, 塩尻, 2023年12月3日.

江川美保, とりこぼしのない月経の教育・ケア・治療を目指して——今の対処は、未来をも拓く, 第38回日本女性医学学会学術集会 シンポジウム5「学校保健とつながる女性医学」, 徳島, 2023年12月3日.

江川美保, 働き盛りの女性におけるメンタルヘルスと生活習慣病——PMS/PMDDの観点から, 徳島県東部保健福祉局 令和5年度職域タイアップ事業 地域職域関係者研修会, 2023年12月7日(オンライン).

Oyasu, K. An analytical description of the contemporary Kominkan, SEAMEO Centre for Lifelong Learning, Ho Chi Minh, Vietnam, 8 December 2023.

木村亮, 希少疾患に着目した神経発達症研究, 公開シンポジウム2023「形質発現制御から形態形成機構学、さらに未来へつなぐ」, 京都, 2023年12月11日.

江川美保, 女性のメンタルヘルスと月経トラブル・鉄欠乏の問題,

令和5年度 こころ・愛・ふれあいネットワーク健康教室, 京都, 2023年12月14日.

西川一弘, 地域と価値を共創する大学づくり, 広島工業大学宮島・土曜講座2023「まちづくりと地域貢献」, 廿日, 2023年12月23日.

月浦崇, 「生涯学」の創出へ向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学術的研究, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

寺本渉, 高齢期における多感覚統合の変化と知覚の可塑性, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

倉田誠, 「やらない」ことが／を生み出す社会関係——サモアの事例から, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

石井山竜平, 社会実装に向けての土壌形成を考える, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

筒井淳也, 高齢期における孤独・孤立の実態と要因——社会学の観点から, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

# 書籍刊行予告

「生涯学」の研究成果を広く一般に発信する一冊

「生涯学」の成果を広く社会に還元するために、一般読者向けの書籍を刊行します。前期公募班の一部と各計画班の成果を、高校生にも分かりやすいように平易に記述します。科学技術や理数教育に関する研究開発等を行う、文部科学省指定の高等学校等「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」約200校への献本も予定しています。

# みんなのための 生涯学

## 人生の見方が 変わる科学(仮)

2024年9月  
刊行予定

月浦崇・柴田悠・金子守恵 編

### 生涯学へようこそ！

従来、「成長から衰退へ」という単純な枠組みで捉えられてきた人間の生涯。しかし、そのような生涯観だけで人の一生を理解することは難しくなっています。本書では、心理学、社会学、文化人類学、教育学の研究者たちがそれぞれの知見を持ち寄り、BPS（生物・心理・社会）モデルに基づく新しい生涯観を描き出します。

### 編者紹介

月浦崇（つきうら・たかし）

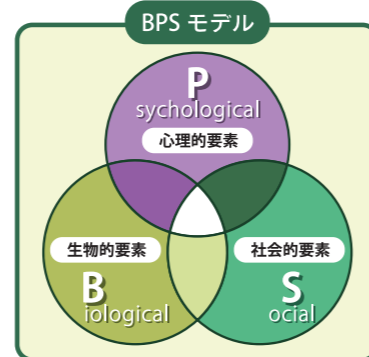
京都大学人間・環境学研究科教授  
専門分野：認知神経科学、神経心理学、  
認知心理学

金子守恵（かねこ・もりえ）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科  
准教授  
専門分野：人類学、アフリカ地域研究

柴田悠（しばた・はるか）

京都大学人間・環境学研究科教授  
専門分野：社会学



### 本書の内容 ※今後変更の可能性あります

#### 第1部 「脳・体」から生涯を捉えなおす

- 1 高齢脳における記憶の可塑性（月浦崇）
- 2 脳画像による発達・加齢の個人差の同定と、生物・心理・社会的要因との因果関係の解明（小池進介）
- 3 プレシジョン・エイジングの実現を目指す神経発達症の発達・加齢研究（木村亮）
- 4 幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明（石原暢）
- 5 性周期を軸にした「女性の生涯学」の提案と社会参加への応用（江川美保）

#### 第2部 「心」から生涯を捉えなおす

- 6 知覚・認知の生涯観の刷新（寺本渉）
- 7 認知機能における予備力の役割（松井三枝）
- 8 中年期から高齢期の生活文脈が認知機能、運動機能、精神的健康に与える影響の検証（権藤恭之）

- 9 睡眠中の夢の解析によるライフキャリア形成支援に関する心理学的研究（松田英子）

- 10 高齢者の会話機能（原田悦子）

#### 第3部 「社会」から生涯を捉えなおす

- 11 高齢者の社会参加の条件はなにか？（筒井淳也）
- 12 幸せな生涯を送るには？（柴田悠）
- 13 技能習得と多面的な発達観（金子守恵）
- 14 モノとともにあるヒトの生涯（倉田誠）
- 15 夫婦・親子交流に基づく「高齢期の社会化」に関する研究（安元佐織）
- 16 縮小・高齢社会のレジリエンスに貢献する高齢者の生活経験の質的研究（笠井賢紀）

#### 第4部 社会実装に向けて

- 17 「生涯学習」政策のこれまでとこれから（石井山竜平）

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地 <https://www.nakanishiya.co.jp/> ナカニシヤ出版